

平成20年度 第33回三原やっさ祭り

人にやさしい祭り委員会 報告書



第33回やっさ祭り実行委員会

人にやさしい祭り委員会

はじめに

2000年に、人にやさしい祭り委員会が新たな体制で再出発してから10年を迎えようとしています。やっさ祭り実行委員会や地域の中でもその存在が少しずつではありますが認識されるようになりました。同時にその存在意義を改めて問われています。なぜ、やっさ祭りに「人にやさしい祭り委員会」が必要なのか。「障害の有無に関係なく、みんなでやっさ祭りを楽しもう」というコンセプトは一体何を意味するのか。委員長として、その意義を次のように考えてみました。

第一は、外出することを躊躇しておられる方を励まし、「出てきてもいいよ、出ておいで」というメッセージを出し続けていることです。やっさ祭りが好きでたとえ障害があってもあの暑さと熱気と連帯感に仲間入りしたいと思っている人たちが、三原のまちにはこんなにたくさんいること。そんな人たちの思いを応援し支えていこうというボランティアがこんなにたくさんいること。この事実は、さまざまな理由によって外出したいという思いを持ちながら諦めていらっしゃる方へ勇気と希望を感じていただけるでしょう。

第二は、どうすれば障害の有無に関わらず、参加した誰もが共にやっさ踊りの連帯感を味わうことができるのかを考え学ぶ場をつくり、それを三原の町づくりに結び付けていくことです。参加者研修会では、車いす介助の仕方、目の不自由な方のためのガイドヘルプ、手話、コミュニケーションに障害をもつ子どもへ関わり方など、ちょっとした技術研修をします。一緒に楽しく過ごすことで初対面の者同士が友達になれた瞬間、学んだ技術は単なる技術ではなく、温かな心の通ったコミュニケーションになります。このような「人へ関わり」が道や、駅や、お店や、地域の中でごく自然に生まれたら、三原は笑顔あふれる町になると思います。

第三は、人にやさしい祭り委員会の“心”を、三原を出発点に日本全国へ地道に広げていくことです。人にやさしい祭り委員会の活動は、県立広島大学ボランティア部の学生が中心となり、各障害者関連施設および各団体の保健・医療・福祉専門職を始め、さまざまな地域のボランティアに支えられつつ、継続されてきました。学生は将来、保健・医療・福祉専門職を目指す金の卵です。活動中辛かったことも、悔しい思いをしたことも、しんどい思いをしたこともあったことでしょう。けれど、ここで得た“仲間”、体じゅうで味わった喜びと達成感と満足感、さまざまな経験は一生忘れることなく、卒業後もそれぞれの活躍の場で人として成長し続けてくれることでしょう。

最後になりますが、第33回やっさ祭り実行委員会 委員長 佐藤協二様はじめスタッフの皆様には準備から当日まで温かなご配慮を頂き、本当にありがとうございました。また、三原市社会福祉協議会をはじめ、三原市ボランティア連絡協議会、三原市福祉のまちづくり推進協議会、三原やっさ祭り振興協議会、三原ライオンズクラブ、三原青年会議所、などなどたくさんのご関係機関やボランティアグループの皆様にも多くのご支援を頂きました。心よりお礼申し上げます。

人にやさしい祭り委員会はまだまだ成長過程にあり、課題は山積み状態です。どうぞこれからもより多くの方々にご支援・ご助言頂きながら、三原やっさ祭りを盛り上げていくとともに、三原の町が障害の有無に関わらず住みやすく、人にやさしいまちになることを願いつつ私の感謝の言葉といたします。

2008年12月1日

第33回 やっさ祭り実行委員会 人にやさしい祭り委員会 委員長 岡田 麻里

発刊によせて

社会福祉法人
三原市社会福祉協議会
事務局長 宝田 義則

このたび「人にやさしい祭り委員会」が、発足10周年の記念すべき年をお迎えになり、心からお祝い申し上げます。

貴委員会は、三原の三大祭りのひとつである「三原やっさ祭り」への参加を通して、ノーマライゼーションの実現と、優しさとバリアフリーの心で三原が笑顔いっぱいの素敵なまちになることを目指し、たいへん貴重な実践をしてこられました。この実践は、平成18(2006)年6月に三原市社会福祉協議会が策定した「地域福祉活動計画」のキャッチフレーズである「しあわせを願う誰もが『主役』になれるまち」の実現を先駆的に取り組んでこられたものであり、改めて委員会の皆様のご努力に深く敬意と感謝の意を表します。

創立10年目の節目にあたり、この祭りを通じて三原の福祉のまちづくりに積極的に参加をされ、地域福祉のさらなる発展の一翼を担ってほしいと願い、最大限の支援をしていく所存であります。

今日、核家族化や少子高齢化が急速に進行している中で、社会福祉に対する意識の変化や課題も多様化してきつつありますが、地域で生活していくには、誰もが尊厳をもって自立した生活をおくることが望まれます。

生活するということは「^{いきいき}生き生き」とすることに他ならず、一市民としてふつうの暮らしを実現するための方策が真に求められています。

そのためには「人」という字が示すとおり、地域住民がそれぞれの役割と立場と可能な範囲で、お互いに支え合うということが重要な意味を持つものと考えます。

行政などの公的サービスを活用しながら課題の解決に結びつける公助はもちろん、地域住民が自主的な活動を行い、地域でともに助け合う共助がまさに現代社会に求められています。まさに地域福祉の活動が重要な役割として注目され切に求められているのです。

本会としましても、「人にやさしい祭り委員会」と手をたずさえて、今後とも地域福祉の推進役としての役割・機能が果たせるよう取り組んでまいります。

結びに、貴委員会の益々のご活躍・ご発展と会員の皆様方のご健勝・ご多幸を心からお祈りし、お祝いの言葉といたします。

はじめに (人にやさしい祭り委員会 委員長 岡田 麻里)

発刊によせて (三原市社会福祉協議会 事務局長 宝田 義則)

目 次

. 活動をふり返るにあたって (人にやさしい祭り委員会 副委員長 大畠 静香)

. 「やっさ」へのそれぞれの想い、そして願い

1. プロローグ

2 「あたりまえ」をもとめて その源流を訪ねる

1) 「ふつう」ということ

2) はじまりは障害者とボランティア

3) 参加をはばむ「壁(バリア)」

4) 「壁(バリア)」をこえて吹き抜ける「風」

5) 車の両輪「“ハート”と“ハード”」

6) 新体制での再出発

3. 窓を開いて“つながる”

4. 「人にやさしいまちづくり」の実現に向けて

1) 具体的に実現するために

2) とともに「学び」、ともに「育ち」、伝え「育(はぐく)む」

3) 「我(わ)がこと」からの出発

5. 「市民祭に障害の有無は関係ないさ」

- 人にやさしい祭り委員会の取り組みを全国の視点から評価する -

. 2008年 第33回 やっさ祭り 人にやさしい祭り委員会 活動報告

1. 実施体制

2. 事業報告

1) 研修会および踊り参加者のアンケート調査結果

2) 踊り

3) 花火

4) 観覧席

5) 露店ガイド

6) 要約筆記

7) メインステージ手話通訳

. おわりに

・活動をふり返るにあたって

第33回 やっさ祭り実行委員会

人にやさしい祭り委員会 副委員長 大畠 静香

『人にやさしい祭り委員会』は、『三原やっさ祭り』での活動を通じて、赤ちゃんから高齢者まで、障害の有無に関係なく、誰もが参加しやすい、観に行きやすい祭り、「笑顔」にたくさん出会え、「笑顔」があふれる祭り、そしてすべての人の願いである「人にやさしいまちづくり」を目指しています。

人は、「笑顔」を見ることで、元気をもらい、温かい気持ちになります。

楽しい事をしていると「笑顔」になれます。

楽しんでいる人を見ると「笑顔」になれます。

誰かと一緒に楽しい事をする、たくさんの「笑顔」に出会えます。

サポートしてもらった人は「笑顔」になれます。

サポートした人も「笑顔」になれます。

「笑顔」は「笑顔」を呼び、人と人をつなげてくれます。

このような「笑顔」いっぱい「笑顔の輪」を作っていくことが当委員会の活動だと考えています。

みんなで「笑顔」を作っていく活動の中で、「明日に架ける橋チーム」には、病気や事故、加齢によって車イスを利用するようになった方など様々な理由で今まで外出を諦めていた方々が『三原やっさ踊り』に参加されるようになりました。

「人にやさしい観覧席」では、お祭りの人混みの中に出て行きにくかったお腹が大きくなった妊産婦のお母さんやベビーカーを押した親子連れ、またシルバーカー、車イスを利用するようになったことで『やっさ踊り』を見ることをためらっていたり、諦めていた方も気軽に参加できるように配慮し、多くの方が観覧されていました。また今年からは赤ちゃんに授乳できるスペースも設置されるようになりました。

全国的にもたいへん先駆的な取り組みですが、祭りのメインステージには手話通訳が自然な形で、あたりまえのように付いています。要約筆記ボランティアのみなさんによってスクリーンが駅前のロータリーに設置され、耳の不自由な方だけでなく、多くの人達が踊りチームの紹介文を目にすることができるようになり、より身近に楽しむ事が出来るようになりました。

また、踊りコースでは休憩地点に、花火会場では本部席近くにトイレ（障害者用含む）も設置していただきました。

踊りコースの駅前のロータリー内では、足元のケーブルがなくなり、平坦なコースになりました。そうすることで、踊りを楽しむすべての参加者の誰もが足元を気にせず、思いっきり踊りに集中して、「笑顔」で楽しく安心して踊れるようになりました。

このようなすべての人にやさしい祭りを実現する取り組みは、市内はもちろん県内各地、そして県外の方々から高い評価を頂き、たくさんの方々から『三原やっさ祭り』に期待をしていただけるようになってきています。

しかし「笑顔」は“楽しさ”だけで生まれてくるものではありません。光には必ず影があります。笑顔の裏には日々さまざまな影、生活のしづらさがあるものです。また影があるからこそ、光が光としてより輝くものでもあります。

さまざまな障害や高齢にともなう介護をはじめ、それぞれの生活のしづらさを解消し、軽くする

ための様々な取り組みが公的に制度化されてきています。

でも残念ながら、公の制度を利用したとしてもそれですべてが解決されるわけではありません。昔から「困った時はお互い様」と言われています。

そんな何気ないちょっとした気配りと、それを行動に移せるほんの少しの勇気。それこそが人の心をなごませ、潤いを与え、人間らしい生き活きとした豊かな暮らしを実現させてくれるのではないのでしょうか。

地域で暮らす人々が知恵と力を出し合って、ともに助け合い、ともに学び、ともに育ち、ともに変わっていくことが現代社会に求められています。

そういう意識が、『三原やっさ祭り』を築き上げていく過程の中で、自分が困った時に助けてもらったことや安心できる環境を経験することによって、より多くの人たちに生まれてくればと思っています。

『三原やっさ祭り』の設立趣旨には、「三原やっさ祭りを市民総参加で心の触れ合いの場づくりの行事として、若者が運営の中心となり、…」とされています。

当委員会の活動では、多くの若者（学生ボランティア）が県内各地や全国から集まって運営の中心を支えてくれています。

そんな若者たちが生活のしづらさを持つ人々とふれあう素直で自然な姿から、たくさんの気付きやヒントが生まれ、元気と勇気が湧き出してきています。

当委員会は、すべての市民がお互いに日頃からちょっとした気配りができ、様々な人たちへの関わり方を知り、「困った時はお互い様」と支え合うような「笑顔」いっぱいのもちになっていくことを願って活動を続けてきました。

「人にやさしいまちづくり」はすべての市民にとっての問題として、また自らの問題として、様々な人たちに理解していただけるような取り組みと、ともに手をたずさえて行動する環境づくりが必要だと考えます。

当委員会は三原やっさ祭り実行委員会の一つの委員会として、『三原やっさ祭り』をより良いものにし、三原をより良いまちにしていきたいと願うたくさんの人との「出会い」、多くのあつく温かい「つながり」をいただき、お互いに刺激し合い、また支えていただいています。

年々様々な対応がなされる『三原やっさ祭り』は「人にやさしい祭り」に少しずつ近づいてきているのではないかと考えています。

しかし、まだまだ課題はたくさんあります。当委員会は今後とも「笑顔のまちづくり」「人にやさしいまちづくり」という視点から「人にやさしい祭り」を通じて、わたしたちの故郷、三原のまちづくりと一緒に考え、ともに行動する「人にやさしい輪」を広げていくよう、精一杯取り組んでいきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

・「やっさ」へのそれぞれの想い、そして願い

1. プロローグ

「呉線で三原やっさへ」

広島頸損ネットワーク

増成 敏彦(呉市在住)

2008年8月9日、恒例の三原やっさ祭りに参加してきました。私自身4度目になります。一言で言えば「今年も暑くて熱かった!」といったところで例年と変わらないので、今回は行程のところからお話させていただこうと思います。

当日は快晴。夏祭り日和です。「夏といえば海!」なのですが日ごろ海には縁遠いので、この機会に海を見ようと思い、体調も良いので呉線で三原に向かうことにしました。

まずはJR八本松駅から広島に向かいます。海田で乗り換えるという手もあるのですが、車椅子では難しいと言われました。(以前、大和ミュージアムでの交流会の時には海田駅で線路の上を歩いて向かいのホームへ渡ったのですが、今は通れないとのことでした。)

広島に到着すると、一旦外に出てエールエールへ行きました。「ロボットアニメ博」という催しを見るためです。マジンガーZからガンダム、エヴァ、そしてドラえもんもありました。懐かしいものも多かったです。アッセの酔心で釜飯を食べた後、いよいよ呉線へ向かいます。

出発してしばらくすると視界に海が広がりました。夏の海にテンションも上がってきます。程なくして水尻の海水浴場が現れます。広島駅からの海水浴客はほとんどここで降りて、電車も空いて快適な感じになりました。電車は呉に到着し、「潜水艦は見えないかな」と目で探しましたが見当たりませんでした。(ちなみにグーグルマップの航空写真ではバッチリわかります。)そのあと広駅で乗り換えになります。それまでも海岸沿いを何度か走ったのですが、広を出てしばらく走った後にもっとも海に接近する区間がありました。車椅子のため視線が低いこともあって、車窓からの景色が下のほうまで全部海です。まるで海の上を走っているようで、これは壮観でした。

海を堪能したあと無事に三原駅に到着しました。電車の中は冷房が程よく効いていたのですが、さすがに外は暑いです。でもとりあえず屋上で豚バラ串をいただきました。お祭りは食べるのも楽しみです。イベントステージを少し見た後、集合場所のサンシープラザに向かいました。エレベーターで上がるとすぐに知った顔に会いました。三原の学生さんとOGさんたちです。昨年と変わらぬ元気さで、こちらも嬉しくなります。各控え室でミーティングのあと、ロビーで出陣式です。頸損ネットワークからは私と小林さんだけで、少々寂しかったのですが、全体の熱気は例年通りです。

外に出てからの待機時間が結構長かったのですが、いよいよ踊りが始まりました。そうすると否応無くヒートアップ、テンション上がります。岡田さんも鑑本さんも相変わらずお元気で、大きな声で前を走ります。夕方になるにつれて沿道のギャラリーもどんどん増えて、対向車線も大勢のチームと派手な山車であふれ、大音響のやっさの伴奏が響き渡り、日常の悩みや憂鬱が消し飛ぶ感覚に陥ります。

やがて我々のチームは終点に近づきますが、まだ宵の口、祭りはまだまだ続きます。3日間やるのですから地元の人達のパワーはスゴイです。

盛り上がったまま解散式も終わって心地よい疲労感が残りました。暑いんだけど、やはりお祭りはいいものです。スタッフやボランティアの皆様にご心より御礼申し上げます。

「明日に架ける橋」に参加して

広島頸損ネットワーク
小林 勝(尾道市在住)

三原やっさ祭り「明日に架ける橋」チーム10周年おめでとうございます！！

時は1998年、頸損ネットワークを通して少しずつ世間の情報というものが入り始めた頃、その頃の私の暮らしといえば頸損ネットワークの交流会にも参加できないどころか、近所にもめったに外出したことが無く、ベッドの背もたれに座ることさえあまりしなかった文字通り寝たきりの生活で悶々とした日々を過ごしていました。



ある日、頸損ネット会報誌を読んでみると、どなたかやっさ祭りの参加者の方の記事で「暑くてどうしようかと思っていたけど、ちょうど夕立が降って涼しくなってほっとした。古跡さんのお家に集まりあって、楽しかった・・・。」嬉しさあふれる感想文を読んだことがあります。

尾道にもみなと祭りや有名なベッチャーまつりなどがありますが、そのとき、わたしには「祭り」に参加する発想そのものがなく、「夕立が来なかったらどうなっていただろう」と思っていました。同時に、頸損の人たち、つまり、体温調節が出来ない者同士が皆が集まり合って楽しむ、しかも夜とはいえ真夏です。驚きを持って読んだかすかな記憶があります。

三原は尾道から見るとほんのとなり町のようなもので、とてもうらやましい気持ちと悔しい思いが渦巻いて言いようのない寂しさがしました。

「もしオレだったら三原までどうやっていくのだろう。

トイレは？真夏に水分補給なしで行けるだろうか？

それより暑さで倒れるよ。」

わたしの頭の中が参加を想定して思い巡らしている、祭りに行きたい自分に気がきました。でも何ひとつ解決できないことばかりのように思え忘れるように、そしていつものように諦めていたのかなあ。

それから時の経つのは早すぎるくらいの速さで経ち、「明日に架ける橋」チームが出来て3年目でしたか、ふと、やっさ祭り「明日に架ける橋」の参加者を募集する申込用紙を目にした時、「あなたのしてほしい介助」という項目があり、その中に「送迎」と記されていました。

重い障害がある人は車いすで移動するのにも大変苦勞をする、全然出来ない、そんな時代でしたから「送迎をしてくれる。これこれ!」、パツ!と光が指したような、心が跳ぶように動いたのを感じました。

「送迎してくれるのなら行って帰れるかもしれないぞ!」、相変わらずトイレは母の介助で「タッピング」と呼ばれる方法でしかトイレは出来ない。そこで朝からガブガブお茶を飲み十分の水分補給をしておいて、三原から迎えが来る午後2時ころまでにはオシッコを出し切っておく。

そういう作業をしておきながら私にとって第一回目のやっさ祭り参加の大計画の実行でした。

当然、暑さは覚悟のうえであったが、確かに暑い。

しかし、それを上回るわくわくするような活気と久しく味わったことがなかった屋台の灯りやどこからともなくお醤油の焦げたイイ香りが漂ってくる。

「祭り独特の雰囲気味わうことが出来た!」

「うれしい!」

「何より達成感を味わうことが出来た!」、と心から感激した。

こころの言葉でいう「よう忘れん」体験でした。

人にやさしい祭り委員会の「障害を持っている人でも祭りを楽しむ」という考えと、それを支える実行力と心意気を感じ取ることで、それを「当然」「あたりまえ」のこととは考えたくありません。

「いつかこの心意気に応えたい!!」、と祭りの帰り道で遠くに見える漁火を見ながら誓ったこと、今でも覚えています。

手を差し伸べてくれる支援がとても嬉しくて、こんどは私自身が人にやさしくなりたい、今よりほんの少しでもやさしくなりたいと思うようになりました。

やっさ祭りが終わった何日かは障害を持つ人に街の人がやさしいと聞きます。街の人たちもそのように人にやさしい気持ちになるのでしょうか。

それが1ヶ月続き、3ヶ月続き……。やがてそれが365日繋がることで、いつもやっさ祭りのような地域社会だと重い障害を持っていてもあたりまえに、ふつうに暮らしてゆける、そんな気がする、勇気が出る祭りです。

「やっさ祭りに参加するということ 息子とやっさ踊りに参加して」

NPO法人 藁(ひこばえ)代表 今井 おとね

障がいをもつ息子と、やっさ祭りに参加するようになって6年ぐらいになります。

障がいがあっても、祭りに参加するたのしみ、それを見ている人達に楽しんでいる姿を見てもらう事、この子達を理解してもらう事、を目的として参加してきました。

明日にかけの橋チームに参加するようになって、4回ぐらいになります。多くの障がいを持つ人達と毎年顔を会わず場でもあり、卒業しても同級生と出会うことができる楽しい場でもあります。

息子の事も少しずつ知ってくれる人達も増え、支援をしてくださる方も増えました。

「やっさ祭り」に参加するということは、新しい出会いをこの地に求めて係っていくという思いでありました。

その当時、“落ち着く”ということがまったくと言っていいほどできにくい、“超”がつくほど“多動”の息子とやっさ祭りに出かけていくことは、とてもとても無謀な事でした。

それでも“彼のために”とやっさ祭りに参加するようになり、「明日にかけの橋」チームに参加するにした時、初めて「人にやさしい祭り委員会」の方々にお会いしました。

どきどきしながら会場に出かけた時は、若いボランティアさんやベテランスタッフさん、看護師さん、手話通訳の方々など多くの人達に迎えてもらいました。

毎回丁寧な説明会、チーム作り、踊りの練習などスケジュールを組んで色々な障がいを持つ人のために、楽しい祭りにできるように心を配って下さっています。

「三原にはこんなにもすごい人達が集まってくれるんだ」とありがたく、たのもしく思っています。

障がいのため、なかなか外に出て行くのがしんどい親子でも、多くの人達に支えてもらって、踊りの輪の中で大きな顔をして歩いている息子の姿を見て、安心しています。

やっさ祭りに集う事は一年ぶりに再会する人もいるし、久しぶりの人もいます。

「元気～」とお互いを確かめ合えるところです。

こんな私たちを支えてくれる、「人にやさしい祭り委員会」が、益々元気に活躍してくれるようこれからも参加していきたいです。

これからもなかなか踊れませんが、元気をだして、息子と一緒に少しずつ歩いてでも、楽しんで生きたいと思います。

2. 「あたりまえ」を求めて - その源流を訪ねる -

1) 「ふつう」ということ

2008年8月9日～11日の三日間、いつものように三原のやっさ祭りが行われた。三原の日常的な夏のふつうの風景である。

今回が33回になるが、毎年いろいろと趣向を凝らして実施されており、三原市民にとっては一年が「やっさ」にはじまり「やっさ」終わるといほど重要な祭りである。

今年も「人にやさしい祭り委員会」は三原やっさ祭り実行委員会のひとつの活動として、総勢200名にもなる「明日に架ける橋」チームを率いて参加した。これも「やっさ」の日常的な風景になってきた感がある。

広島県には「広島頸損ネットワーク」という頸椎や頸髄を損傷した障害者のみなさんの当事者グループがあり、メンバーのみなさんは平成10(1998)年から毎年参加されている。

その会報誌の「きりん」に投稿された増成敏彦(呉市在住)さんの感想は、まったく「ありふれた」「なにげない」「ふつう」の感想である。しかし増成さんは頸椎損傷というたいへんに重度な「障害」を持っていらっしゃる。その重度障害者が書いたこの文章からは、「やっさ」踊りに参加することに、どこに「障害」が、なにが「障害」なのか、特別な“なにか”を感じさせるものは書かれていない。頸椎や頸髄を損傷するという身体の障害を知っている人たちや日常にかかわっている人でなければ、そのたいへん重度の「障害」や「生活のしづらさ」は分かりにくいだろう。

「やっさ」祭りに重度障害者が参加するということが「普通のこと」「あたりまえ」になってしまっているのだろうか。

尾道市に住んでいらっしゃる同じ障害を持ち、広島頸損ネットワークのメンバーでもある小林勝さんをはじめ三原市の今井おとねさんも、以前から継続して参加されており、「ふつう」にするための道のりを、ご自身の体験を通して生活実感をともなって、私たちに強く訴えかけるものがある。

2) はじまりは障害者とボランティア

やっさ祭りに障害者が組織的に参加することになった歴史はかなり古い。

三原市社会福祉協議会の資料を調べると、第1回大会のあった昭和51(1976)年にはやっさ祭りに老人福祉施設の入所者や身体障害者の方を招待した記録がある。

そして第3回の三原やっさ祭りがあった昭和53(1978)年8月12日に、その年の2月に設立したばかりの「三原ボランティア協会(現在の三原市ボランティア連絡協議会)」のチームとして、三原ライオンズクラブの支援を受けて障害者が参加した記録が残されている。(左の4枚の写真)

このときのチームには電動車いすを使用した身体障害者や知的障害者、また福祉関係者、ボランティア活動団体の方々が参加し、統一音源ではなく地方(じかた)による生の演奏であった。

このチームでの参加は昭和56(1981)年まで続いている。

その後、少し記録が途絶えているが、昭和59(1984)年、昭和61(1986)～63(1988)年には三原市民生・児童委員連合協議会、福祉関係団体、三原市社会福祉協議会、三原ボランティア連絡協議会、障害者の合同チームとして出場している。



平成元(1989)年からは、三原市民生・児童委員連合協議会が主体となって障害者もボランティアも一緒になって平成 10(1998)年まで出場している。

そして、平成 8(1996)年に徳島の阿波踊りにケア付きで参加する「ねたきりになら連」に刺激を受けて三原市やっさ祭り実行委員会に「人にやさしい祭り委員会」が誕生し、現在まで活動を続けていくことになる。



さて、月刊福祉(1996年11月号)に「ねたきりになら連」の記事が掲載されている。それによると「ねたきりになら連」の活動が始まったのは平成 5(1993)年である。

「ねたきりになら連」実行委員会事務局の久米秀昭氏は、「たとえ障害のある高齢者であっても「ねたきりになら連」を通して、地元の様々な行事に参加できることを理解し、ノーマライゼーションを具現化する社会づくりに参加して欲しい。そのためには、これを支えるボランティアの育成も併せて行っていきたい。」という願いを込めてスタートしたと述べている。

また、全国に「お祭りネットワーク」が広がっているが、そのいくつかを挙げてみると、

松山まつり	「野球拳踊りねたきりになら連」	平成 6(1994)年
大阪府八尾市	「河内音頭ねたきりになられん」	〃
青森県	「ケア付きねぶたじょっぱりたい」	平成 8(1996)年
大阪府高槻市	「高槻祭り」	〃

“祭り”へ障害を持った方が参加していった歴史をたどってみると、徳島の「ねたきりになら連」をはじめ、全国の活動のほとんどが高齢者の介護予防やリハビリテーションの取り組みから始まっている。

それに対して三原の場合は、国連の「障害者の権利宣言」に始まった障害者の“完全参加と平等”からスタートしていることが大きな特徴のひとつである。

1975年(昭和50年)に国連は「障害者の権利宣言」を採択し、障害者の基本的人権と障害者問題に関する指針を示した。

1976年(昭和51年)の第31回総会において、1981年(昭和56年)を「国際障害者年」とし、障害者の「完全参加」をテーマに国際的な取組みを行うことが決議された。

1979年(昭和54年)の第34回総会において、「国際障害者年行動計画」が決定された。この計画の中でテーマが「完全参加」から「完全参加と平等」へと拡大されるとともに、国際障害者年の理念と主な原則、各国のとるべき措置、国際連合の事業等についての指針が示された。

この時期における三原市の取り組みとして、1979年(昭和54年)には「三原市社会福祉施設等連絡協議会」が組織化されている。

翌年の1980年(昭和55年)には「三原市国際障害者年推進協議会」が結成されて1981年(昭和56年)の国際障害者年を迎え、次の1982年(昭和57年)には「三原市障害者(児)福祉推進協議会」と改組され、後に現在の「三原市福祉のまちづくり推進協議会」へと発展を続けている。

このように見ていくと、なんと「ねたきりになら連」を遡ること15年も前から三原ではすでに活動が始まっていたことになる。

今から30年も前に“祭り”に障害者が出るということはたいへんなことであつたらうと

思われる。

このような時期にたいへん驚くべき先駆的な活動が行われてきた背景はなんだろうか。三原という地域の力は、どのような風土が生みだしているのだろうか。

「やっさ」の魅力はどこにあるのだろうか。

三原のやっさ踊りの由来を紐解くと、その公式ホームページには次のように説明されている。

「永禄10年(1567年)、戦国時代の智将とうたわれた、毛利元就の三男小早川隆景が、瀬戸内の水軍を統率するために水、陸、交通の要地である備後の国三原の湾内に浮かぶ小島をつないで海城を築きました。

やっさ踊りは、この築城完成を祝って老若男女を問わず、三味線、太鼓、笛などを打ちならし、祝酒に酔って思い思いの歌を口ずさみながら踊り出したのがはじまりと言われ、それ以来、大衆のなかに祝ごとは"やっさ"に始まり"やっさ"に終わる習わしになったと伝えられています。」

三原の発展の基礎をつくったのは戦国武将 小早川隆景である。

隆景に対する豊臣秀吉の信任はたいへん厚く、外様であり陪臣でもある隆景に異例ともいえる恩賞を与え、さらに五大老に迎えて優遇し、「自分以外で天下を治める者がいるとすれば、そのひとり」と言わしめ、黒田如水は隆景の訃報に接し、「これで日本に賢人はいなくなった。」と嘆じたという。また江戸時代の史家は隆景のことを、「治世撫民の跡深くして、愛和をもっぱらとする仁将」と賞賛した。

三原という風土を考えると、やっさ踊りの起源が「多くの市民が敬慕し、とても誇りに思っている」「小早川隆景」という“象徴”にあることは重要である。

また、広島を考えると、世界で初めての被爆地“ヒロシマ”と、全国的にも珍しい「“市民”球団」の広島カープを避けて通ることはできない。

広島カープには熱狂的なファンがたくさんいらっしゃる。笑い話のようであるが、学校のテストの成績もカープの勝ち負けで大きく左右されるほどであった。廃墟から立ち上がりつつあった広島カープにかける思いは、他県では理解しがたいほど、たいへんに強い。

その球団が昭和26(1951)年に深刻な球団経営状態となり、その時、球団の資金難を救うべく広島市民が酒樽に募金を募った「樽募金」で球団存続に必要な当時のお金で400万円を集め、四方八方手を尽くし解散を回避した一件は、平成13(2001)年5月1日放送のNHK「プロジェクトX～挑戦者たち～」で「史上最大の集金作戦 広島カープ」として取り上げられたほど有名である。またこの度の“市民”球場建て替えにおいても「樽募金」が復活し、多くの“市民”が協力したことは周知の事実である。これらはいずれも広島という風土をよく現しており、三原においても例外ではない。

昭和50(1975)年、まさに国連「障害者の権利宣言」のあったその年、広島カープは広島県民が待ちに待った初優勝をし、歓喜と興奮の渦に包まれる空前の盛り上がりを見せた。これが現在5月の連休に行われているひろしまフラワーフェスティバルの発端となった。

その翌年の昭和51(1976)年、三原市ではそれまで花火大会を商工会議所、やっさ踊りを観光協会、夏祭り子どもやっさを商栄会、と三団体がそれぞれに開催していたものを主催団体を一本化し、より盛大にしようと第1回やっさ祭りが実施された。

広島興奮と熱気はなおも続き、広島カープは昭和54(1979)年・昭和55(1980)年には日本シリーズ2連覇を成し遂げ、昭和59(1984)年には3度目の日本一に輝いている。



また広島と海外移住の歴史も県民性に関係している。ハワイへの第1回移民船シテイ・オブ・トーキョー号が横浜港から出帆した1885年(明治18年)から10年のうちに、11,122人(総人数の38.2%)の広島県人がハワイへ渡り、全国第1位の移民送出県である。さらに、新商品の販売テストは、まず広島で実施すると言われるほどであり、新しいものに物怖じせずチャレンジする好奇心の旺盛さ、進取の気風にも関係が伺われる。

三原のやっさ祭りへの障害者の参加の源流には、やっさ踊りが本来的に持っている“特質”、そこから生み出される三原の風土、また被爆による廃墟から復興の歴史、“「市民球団」広島カープや海外移民が象徴する広島の風土や県民性、そして障害者の権利宣言・・・など時代の流れ、地域の人々が無条件に共有できる“共通の体験”や“共通の価値観”、“象徴”の存在という素地があることも特徴であろう。

さらに、「やっさ踊り」が“老若男女”を問わない、身も心も全身を使って“よろこび”を表現する「笑顔」の“踊り”であることも特徴として注目できる。

また「樽募金」にも共通するが、“市民”のボランティア活動”として始まったことも特徴と考えられる。

人にやさしい祭り委員会に「明日に架ける橋」チームができて丸10年がたち、新体制で再出発して来年で10回目を迎えるにあたり、以下の報告をとおして、“いま”、三原という“まち”を見つめ直し、「人にやさしい祭り委員会」の今後の活動の参考としてみたい。

3) 参加をはばむ「壁(バリア)」

「あたりまえ」を求めて、三原の「やっさ踊り」では30年も前から取り組みがなされてきていることが確認された。

しかし、小林勝さんも述べられているように、参加するにあたっては今もなお、さまざまな「壁(バリア)」が存在している。

いまでこそ車いすは日常の風景のひとつになってきている。

今年1月5日の早暁、満106歳で遷化(せんげ)された大本山永平寺の七十八世貫首、宮崎奕保(えきほ)禅師は、お亡くなりになる直前まで現役住職として若き修行僧に厳しく指導をされていた「車いすの禅師様」としてメディアで広く報道され、その映像を目にされた方も多い。そのように“えらい”方々や著明人も車いすに乗っている姿をあらゆる所で日常的に目にするようになった。いまや三原市内でもさまざまところで多くの車いす利用者を目にすることが「あたりまえ」となり、市民権を得てきたように思われる。

しかし、やっさ踊り参加のパイオニアのひとりであり、いまでは三原の障害者のリーダー的存在のひとりである「はげみ会作業所」代表の内秀孝さんは、やっさ祭りに参加した当時の「うれしさ」と同時に、悩ましい目に見えない「壁(バリア)」を、「参加する勇氣」「恥ずかしさ」という表現で以下のように語っている。

最初に車いすで、参加したのは20数年前になると思います。まだ車いすを使っている障害者には、参加する勇氣もない現状で、しかもバリアフリーになっていませんでした。その上、踊る距離が長かったように思います。帝人通り、本町、西町経由で、多くの方に声援をいただいた思い出があります。

参加するきっかけはなんとなく、でも恥ずかしい気持ちは多いにありました。

参加チームは、民連(三原市民生委員・児童委員連合協議会)からでしたが、“接待”は本当に良

かったです。民連からは約15年ほど参加させていただきました。“接待”がとてもよかったので、それを目的に出ているところもありました。しかし、車いすでの参加はわたしひとりだけでした。

友達がやっさの写真コンテストに応募して、金賞をとったときの写真が私を写したものでした。この間、私も個人賞をいただいたこともありました。

民連を離れて、次は車いすバスケットチーム（浮城スポーツ）で青少年ボランティア「いなほ」のみなさんとやっさ踊りに参加しましたが3年で幕を引きました。

何回参加しても、恥ずかしいのは変わりませんでした。

また、障害者の母でもある今井おとね（NPO法人 薬（ひこばえ）の代表）さんは、「壁（バリア）」の存在を暗に示して、「参加するということ」の意味、「ひとに理解してもらうこと」、「安心で安全に」参加できることの大切さ、「出会う」ということをテーマに語っている。

4) 「壁（バリア）」をこえて吹き抜ける「風」

平成7(1995)年、三原に広島県立保健福祉短期大学（現在の県立広島大学）が開学した。できたばかりのボランティア部は市内の福祉施設と交流し、積極的な活動を行っていた。

その翌年の平成8(1996)年、第1期生でボランティア部部長だった大谷麻祐子さんたちが前年に見学した徳島のケア付き阿波踊り「ねたきりになら連」に啓発され、三原のやっさ踊りでも車いすの人たちの連（チーム）をつくって参加できないだろうかと思いつき、行動を起こしたことから第21回三原やっさ実行委員会の中に「ひとにやさしい祭り委員会」が発足し、あたらしい風が起こり活動が始った。

当時、ボランティア部の部長であった大谷さんたちは三原市社会福祉協議会に相談したが、なんらかの理由があったとおもわれるが、色よい返事が得られず困っていた。

そのため大谷さんたちは、前年から交流のあった市内の身体障害者福祉施設である寿波苑に協力を求め、人にやさしい祭り委員会としてはじめて当事者のみなさんと8月9日(金曜日)に参加することとなった。

このとき、寿波苑はスタッフを総動員し、寿波苑に入所している利用者の方々とともに参加し、その時のノウハウを元に現在の踊りマニュアルの原型となるものを作成して重度障害者のやっさ祭り参加をサポートしている。

寿波苑は現在に至るまで、やっさ祭りに障害当事者のみなさんや地域のボランティアのみなさんと参加を続けている。

それから2年後の平成10(1998)年、学生ボランティアと市内で暮らす一人の障害者の出会いが、新たな、そして大きな展開を生み出した。

それは三原やその周辺の「地域」に暮らす障害者のみなさんやボランティアと一緒にやっさ祭りに参加するという大きな広がり持っていた。同時に今までに無いエネルギーを感じる、そして、これまでの取り組みを再考せざるを得ないような、衝撃的な取り組みでもあった。

当時、古跡博美さんは頸椎を損傷して体の自由がきかず、いわゆる寝たきり状態で、しかも三原で初めて人工呼吸器を使用しつつ在宅で介護や看護を受けて生活をはじめていた。

そこへボランティア部の部長であった池間響美(旧姓 中澤)さんや副部長の梁井祐子さんたちが、一緒にやっさ踊りに参加しないかと誘ったことがきっかけであった。

以下は、その時のことを古跡さんが『明日への架け橋(2005)』という手記に書かれている。

「明日に架ける橋」

こせき ひろみ
古跡 博美

1998年夏、毎年行われている「三原やっさ祭り」に、参加することになった。きっかけは、その年の1月、三原にある広島県立保健福祉短期大学のボランティア部の方が自宅へ、「いっしょに“やっさ踊り”に参加しませんか!？」と話をもってきてくれたことだった。

検討した結果、さまざまな障害を持ったいろんな人たちと、健常者の人たちが、一緒に踊るチームを作ろうということになった。短大のボランティア部の方々が中心となり、障害者の作業所、グループ、団体に連絡を取り、すったもんだを乗り越えて、チームは結成された。



(中略)

総勢 132 名もの団体になった。

チーム名は、私の提案した“明日に架ける橋”。サイモン&ガーファンクルの曲からとったのだが、この歌詞から感じた思いを込めて、名付けたのだ。

(中略)

数か月の練習を経て、迎えたやっさの当日。

広島頸損ネットワークのメンバーはわが家に集結し、いよいよ出陣。

午後6時過ぎ、集合場所の隆景広場に出発したが、途中雨がポツポツと落ちてきた。「大丈夫、大丈夫」と声を掛け合いながら広場につくと、急に雨足が強くなり、慌てて高架下に逃れたら、まるで待っていたかのように、雨がバシャバシャバシャと降ってきた。

私達のチームの出番は一番初めだったが、実行委員の人に無理を聞いてもらい、出番を遅らせていただいた。

しかし、雨はやむ気配はなく、ついに決断の時がやってきた。広島頸損ネットワークからの参加者は、電動車いすを使用している人が多い(呼吸器付きも)のだ。濡れるのがわかっているも踊るのか、それともおとなしく引き下がるのか。

「どうされますか?」と参加を聞かれたとき、みんなの方を見てみた。するとみんな「このまま引き下がるものか、いざ出陣!」というような顔!?をしていたので、「まいりましょう!」と答えた。

すぐに順番がまわってきて、整列するとなんとあれだけ降っていた雨が上がったではないか!! しかも、風が少しだけ涼しさを運んでくれる。そうか、雨のおかげなのか。

そして、神様に感謝しながら“明日に架ける橋”チームは、やっと旅立つことができた。旅立ちは少しだけ不安もあった。いろいろな障害を持った者たちの集まりは、周りの人たちにはどう映るのだろうか?多くの健常者に助けられているとはいえ、どうせ踊りも列もバラバラだろう。。。。。。。

しかし、それはいらぬ心配だった。そんなことを少しでも頭に浮かべた自分が恥ずかしくなるほど、沿道のみなさんから温かい拍手、笑顔、声をかけていただいた。

もううれしくて、うれしくて。涙が雨のように流れ出てきた。そして我々のチームは、最優秀新人賞を受賞することができたのだ。

平成10(1998)年7月11日(土曜日)に「明日に架ける橋」チームの合同顔合わせ会が行われた。その時、踊りの当日に会場でアナウンスされる予定の「明日に架ける橋」チームの紹介文が、多くの参加者が集まる中で委員長の挨拶とともに次のように披露された。

「みなさん、こんにちは。私たちは障害の有る無しを問わず、誰もが気軽にやっさ踊りに参加できるチームとして、今年はじめて発足した「明日に架ける橋」です。

このチームは障害を持つ人が主体的に参加し、支援者とともに作った三原の未来です。

あいうえおの会、きぼう作業所、さぼてんの会、どれみの会、ひまわりの家、広島頸損ネットワーク、三原市障害児・者スイミングスクール「スイミー」、三原市障害者の生活保障をすすめる連絡会、ワークセンター創造、三原ライオンズクラブ、福山平成大学有志、広島県立保健福祉短期大学ボランティア部、三原やっさ祭り実行委員会などなど、本当にいろいろな人が今宵ここに集まりました。

障害者、健常者という垣根を超えてすべてのひとに心の架け橋が架かることを願って、今日は一生懸命踊って、盛大に盛り上がりたと思います。

そして、障害者の社会参加に向けて一歩でも前進できればと参加者一同願っています。(中略) みなさん応援をよろしくお願いします。」



また、その当時のボランティア部の部長で「人にやさしい祭り委員会」の委員長であった池間響美(旧姓：中澤)さんと副委員長であった梁井祐子さんから、今回の報告書を作るにあたって、当時のことをふり返ってお手紙を頂いている。

「明日に架ける橋」を見守る三原市の皆様へ

広島県立保健福祉短期大学 ボランティア部(第3期生)

池間 響美(旧姓：中澤 沖縄県平良市)

皆様。今年の暑い夏はいかがでしたか? 長年にわたり「明日に架ける橋」を支えてくださっている方、今年初めて参加された方、それぞれの胸に響く何かを手に入れられたことと思います。

私は12年前、初めてボランティア活動に参加し、その一年後には「人にやさしい祭り委員会」の委員長になっていました。20歳だった私は毎日が困惑に巻き込まれ、涙したり、笑ったり、ただただ熱かった……。

その中で、一つの活動に参加し、やさしい誠実な気持ちで取り組めば、自然と情報が入り、ネッ

トワークが広がり、やがては自分たちがネットワークの架け橋になっていることを学びました。チーム名を「明日に架ける橋」と決めた瞬間の輝いた気持ち、忘れません。

無知だから失敗したこともありましたが、無知だから達成できたことも多くありました。何より大切なことは“ 一歩踏み出す勇気 ” だと思います。地域の社会資源に目を向けて、それらが不足していると感じたならば、必要な資源の開発に積極的に働きかけていく視点を持つことだと思います。

あの時、一步一步前進し始めたからこそ、私は大きな翼を手に入れ、単身、沖縄県宮古島まで飛来することができました。PT(理学療法士)として働きながらプロのダイバーの資格を取り、バリアフリーのダイビングにも参加しました。

しかし、移住から6年がたち、結婚、出産、育児、仕事の慌ただしい生活の中で、“ 熱い心 ” をしまいこんでいたみたいです。この原稿を書きながら思い出してしまいました。20歳だった私も、今では30歳2児の母です。過去、現在、未来へつながる架け橋を築いていくには今何ができるかを思い巡らせています。また、一歩踏み出してみようかな・・・と。

いつか子供たちを連れてやっさ祭りに参加できる日を夢みて、宮古島からも「人にやさしい祭り委員会」の皆様へ感謝とエールを贈りたいと思います。

「明日に架ける橋」の立ち上げに参加させて頂いて

広島県立保健福祉短期大学 ボランティア部(第3期生)
梁井 祐子(広島市)

「 “ やっさ祭りに出て踊ってみたい ” という希望のある人なら、 “ 誰もが参加できる ” お祭りになればどんなに素晴らしいだろうか・・・ 」 という思いから、平成8(1996)年にやっさ祭り実行委員会の中に「ひとにやさしい祭り委員会」が発足し、福祉短大のボランティア部が運営を任されていました。

入部2年目の平成10(1998)年のやっさ祭り。私たちが「ひとにやさしい祭り委員会」の運営を任されることになりました。といっても何をして良いのか、何から始めれば良いのか全く分からず、どう進めていけばいいのか色々悩む日々でした。どういう方が踊りに参加してみたいと思っらっしゃるのか、人数はどれくらいなのかよく分かっていない状態でしたので、みんなで色々話し合いの中で「まずはひとにやさしい祭り委員会の “ 趣旨 ” を皆さんに直接お伝えすることから始めていこう」という事になりました。

私達は色々なところに電話をかけたり、直接伺って話をさせて頂きました。最初はなかなか前向きな返事が頂けませんでした。が、何度かお話をさせていただくうちに、だんだん “ 趣旨 ” に賛同して頂けるようになり、「協力するよ」と言って下さる方、「踊りに参加してみたい」と言って下さる方が少しずつ増えていきました。そしていろいろな人に架け橋がかかり、人数も増えていき「明日に架ける橋」という集まり「連(チーム)」が結成されたのです！！

その間、いっぱい素敵な出会いがあり、様々な方と親しくなる事ができました。

当日は何と言っても笑顔！！、この一言につきました。「みんなで集まればこんなに楽しく、嬉しい気持ちで踊りに参加することができるんだ」と、とても心が熱くなりました。

後で考えると至らない点は本当にたくさんあったかと思えます。しかし第一歩を踏み出し、それが10年経ち更に発展している事を本当にうれしく思います。

10年前を思い出しながら書かせて頂きましたが、とても懐かしく当時の気持ちを思い返すことができました。当時、何か形にしたいと一生懸命でした。一歩踏み出し、みんなで形に出来たことはとてもうれしい事ですが、その過程で色々な方と出会えた事、お互いを知り一緒に何かを作ろうと

がんばった事、いろいろな人に架け橋がかかったことが私の財産になっています。

今、3人の子供の母親となり、なかなかやっさ祭りに参加出来ていませんが、また是非参加したいと思っています。

当時の「常識」からすればとんでもないことであったかもしれない。体温調節もままならない頸椎や頸髄を損傷した重度障害者がクーラーもない真夏の町に、しかも人工呼吸器を付けて踊りに出る?! 機械が壊れたらどうしよう?! 痰がつまったらどうする?!・・・

雨で身体が濡れてしまえばたちまち風邪をひいて肺炎を起こす可能性があり、生死にかかわる事態になるかもしれない。しかも夜・・・、たくさんの祭りに参加している人々の雑踏の中、大音量の祭り囃子、お酒も入って気分が高揚している人たちもたくさんいる。

たくさんの不安とリスクが渦巻く状況の中で、たくさんの障害者の方が参加しているチームをどうやって学生ボランティアがサポートするのか。事故や不測の事態を考えると、とても危険なミッションであった・・・

誰もやりたくはないと思っていても仕方がなかった・・・

それを可能にするには、一糸乱れぬチームワークとリーダーが必要であった。

そして、彼らは見事にそのミッションを成し遂げた。たぐいまれなリーダーシップを発揮し、ネットワークを築き上げ素晴らしいチームワークで、すべてを完璧にこなした。

緊急時の医療体制は、みはらケアネットワーク代表で広島保健福祉短大の森田愛子先生(看護学科 写真の右前)を中心に緊急時の医療体制が生まれ、三原ライオンズクラブの支援も得て、強力なサポート体制がいつのまにか出来上がっていた。



みんなが笑顔で踊り終わり無事に帰宅したとたん、やっさ踊りの会場は土砂降りの大雨に見舞われていた。それは歓喜の雨であったかもしれない。

5) 車の両輪「“ハート”と“ハード”」

その次の平成 11(1999)年も、学生ボランティアが中心となって運営し、やっさ祭りに参加していた。彼らは一生懸命に支援をし、見事にやり遂げていた。しかし課題も見つかった。すでに学生だけで運営するには参加規模が大きくなりすぎていたのである。これは難題であった。

参加者の状態を事前に把握して安心で安全なサポート体制を築くには、あまりにもたいへんな作業になっていた。

それは一方で地域の障害者のみなさんのやっさへ出て踊りたいという期待が大きかったためもあるのだが・・・

ここまでの活動をふり返ってみて、「人にやさしい祭り委員会」が活動を始める前後で大きく変わってきている点がある。

従前よりもさらに専門的な介護が必要な障害当事者が参加可能になったという点である。積極的にサポートができる体制整備、「環境づくり」という点で、大きく異なっていると言える。

もうひとつ変わっていることがある。池間さんは「無知だから達成できた」と述べているが、障害当事者に寄り添って、その想いにつきあい続ける「感じる力」が地域の中に芽生えたことである。

さらに、それを「具体的に実現する力」が三原の地域の中にあることを“証明”したことである。

「感じる力」と「具現化する力」は、まさに車の両輪である。このふたつが相まって、大きな展開が生まれたと思われる。

6) 新体制での再出発

この年、三原市にボランティアコーディネーターとして小川和子さん(写真)が着任することとなる。



また、三原ボランティア連絡協議会は今までの社会福祉協議会への依存体質を脱却し、その体制を強化すべく、盛谷静男会長を先頭にボランティアグループの紹介パンフレットを自主製作することに着手し、さらにボランティア・アドバイザーの養成を他に任すのではなく、自主的にボランティア自身で行っていった。

そして迎えた平成 12(2000)年 3 月 21 日、前述した「人にやさしい祭り委員会」の課題を解決すべく、三原市社会福祉協議会と三原市ボランティアセンターが地域のボランティアや団体、個人に呼びかけ、第 25 回記念三原やっさ祭りの「人にやさしい祭り委員会」の新たな組織化について協議し、今までの流れを引き継ぎながら地域のネットワークを再構築していくこととなった。

大学のボランティア部の部長であった岩間雅子さん(写真 左側 右は副委員長の堂城さん)を委員長に、三原市内の福祉関係施設や市民活動団体、ボランティア、三原ライオンズクラブも継続して支援し、強力にバックアップする新体制での再出発となった。



特に重要であったのは後方支援をする事務局体制の構築であった。サポート側のネットワークの核が必要であった。いままでの昭和 53(1978)年から平成 12(2000)年まで、様々な団体が中心となって取り組みがなされてきたが、いずれも受け皿が十分であったとは言えなかった。だれもが“安心”で“安全”にやっさ祭りに参加できる体制整備こそが必要とされていたのである。三原市ボランティアセンター(現在の三原市ボランティア・市民活動サポートセンター)はその中心的役割を現在に至るまで果たすこととなり、そのコーディネーターは大活躍をしている。

ひとが集まり活動するには明確な“理念”が必要である。「感じる力」は“理念”や“趣旨”に凝縮される。

「人にやさしい祭り委員会」の源流をたどっていくと、障害者の「完全参加と平等」の達成という大きな“行動目標や理念”、また「明日に架ける橋」チームの立ち上がりには同じく“趣旨”があった。

しかし、活動が続いていくうちに、その初心や原点を見失ってきたのではないだろうか。

参加するための「ハコモノ」が先行して、なんのために、誰のために、どうして参加するのか、その意味や意義といった「心」が何時とはなしに見えなくなってきたのではないだろうか。

また、“援助する技術”と“技術を持った人材”がそろっていることも重要な要素である。

しかし、それを“後方で支援する体制”づくりができていなかったことが課題であったように思われる。これらの“3つの要素”のどれが欠けても、うまく機能しない。

その辺りを内 秀隆さんは、「私の経験から「人にやさしい祭委員会」に期待するのは、マンネリにならないように障害にあった思いやりを考えた行動を重視して欲しいと思っています。」と厳しく戒めている。

障害があろうが無かろうが、高齢者も子どもも、妊娠しておなかの大きくなったお母さんも、みんなみんな「ひとりの市民」として、一参加者としてやっさを踊り楽しむことを明確にする取り組み。人にやさしい祭り委員会の源流は、特別なことを願ったのことはなかった。

図らずも学生ボランティアが地元である三原市の“おとな”に突きつけた疑問や課題はまったく

“自然”であり、ストレートであり、たいへんに鋭かった。

すべては、“ひとりの市民”として、「あたりまえ」を“あたりまえ”に、そんな「ふつう」のことを“普通に”実現したいという、“ありふれた日常”の「ひとりの市民」としての“想い”が原点であり、出発点であった。

そんな“想い”に共鳴し、実現するために、様々な人々がつどい、つながり、知恵と力を結集し、さまざまな「壁(バリア)」をなくし、自由に行き来できる「橋」を架けることが今日まで「人にやさしい祭り委員会」に期待されていることであり、これからも活動を“継続していく”ということが求められている。



人にやさしい祭り委員会が「お祭りのゴミ問題」をやさ実行委員会に提起し、環境ボランティアの「エコレンジャー」委員会が発足し、大活躍しています。

3. 窓を開いて“つながる”

「“生きる”楽しさを感じて」

三原市ボランティア連絡協議会
会長 盛谷 静男

私は、2000(平成12)年3月21日、三原市社会福祉協議会の呼びかけに賛同する団体・個人で「人にやさしい祭り委員会」に三原市ボランティア連絡協議会から参加したのが始まりです。それまでは大学生が主体となって「明日に掛ける橋」チームとしてやっさ踊りに参加していたのです。



委員会は、過去の経緯を伝承して、新たな企画を加え実施に向けて会議を重ねる取り組みがされました。学生が中心となり、私たちは側面で支援する委員会が出来たのです。

私は好きな踊りで参加しました。それも先陣でゼッケンをつけて可愛い孫と楽しく踊りました。総勢300人近いチームの大世帯でしたが、みんなが笑顔でつながった輪ができたと思いました。

毎年の楽しみにしていましたが、2003年6月24日、糖尿病が原因で脳梗塞になり、この年はわが家でケーブルテレビを見ながら声援をおくりました。

幸い症状が軽く、2005(平成17)年のやっさ祭りには右手・右足に多少の痺れがあるものの、すきな踊りが出来たらと参加しました。

多くの仲間から再び参加するのを「待っていたよ!」、ととても嬉しい言葉をかけられました。そして「明日に掛ける橋」チームに勢いをつけるため、水戸黄門一行、チャイナ娘、マツケン・サンバ、パンダの縫いぐるみ、などなど、扮装して踊ろうと仲間呼びかけて華やかな一行が先陣をきって踊りました。



私も「大丈夫？」と仲間から声をかけていただき、また、そばには孫もついていてくれ、無事に最後まで踊る事が出来ました。

2006年からは、踊りは無理だから、裏方として「人にやさしい観覧席」を担当しています。

そこでも車いすの人、高齢者の人など新たな“出会い”が出来ました。人にやさしい祭り委員会に参加して、病など忘れて

“生きがい”を得ています。

年1回の祭りですが、仲間の“出会い”で、平常時から、苦しい時は“助け合い”、楽しい時は“分け合あえる”、“生きる”楽しさ”を感じています。

「私と人にやさしい祭り委員会」

やっさ踊り振興協議会 花渡 武司

私は今から40年数年前、社会福祉協議会の木曜会、ボランティアグループに入会し、多くの人達と苦楽を共にしました。それまで私には特に何という趣味が無く、仕事一つでした。

1970年(昭和45年)大阪万国博覧会があり(やっさ踊り振興協議会発足)広島県代表やっさ踊りが出演し大盛況に終わりました。このやっさ踊りを三原に残そうと、昭和46年より安達清人先生指導によるやっさ教室が行われると知り、三原福祉館へ練習に通いました。(昭和47年やっさ会は、振興協議会)



たいへん不器用な私でしたが、努力し色々な所へ出演参加させていただき、やっさ踊りという楽しさがわかってきました。平成2年、ふるさと創生、出張指導が始まり、平成15年より出前講座が出来、出張指導しています。

人にやさしい祭り委員会(小川和子事務局長)より依頼があり出向きました。以前、ボランティアに携わった方々とも会い、懐かしさの中に楽しく練習することが出来ました。



また、各グループの人達がやっさ踊りに出場する為、事前にハヤシの練習をされていて、勢いに圧倒され、楽しくやっさ踊りの練習を終えることが出来ました。

毎年1回の練習ですが、皆様に会えることが楽しみで今に至っています。初心を忘れないで、やっさ踊りを通じて「人にやさしい祭り委員会」の皆様といつまでも続くことを願います。

「やっさ祭りで得たもの」

広島県立保健福祉大学ボランティア部OG
常盤台病院(山口県宇部市)
言語聴覚士 八尾 朋代

私が、やっさ祭りに初めて参加をしたのは大学1年生のときでした。ボランティア部の先輩から誘われたのがきっかけでした。それから、5年が経ちました。今年はOGとして、初めての参加でした。三原に帰ってきて、ボランティアセンターのドアを開けると、思わず「ただいま～！」と言ってしまいました。

この5年間でやっさ祭りから得られたものは、本当にとっても多かったです。何を得られたのか、というと具体的には本当に述べられないくらい、たくさんの方が勉強できました。

その中でも1番自分にとって勉強になったことは、たくさんの方との出会いでした。大学へ通っているだけでは出会えないたくさんの方々と、祭りを通して出会い、一緒に笑顔になれました。

また、準備の期間中は、本当に自分で何を考えなくてはならないのか、当日の動きはどうなるのか、今やっておかなければならないことは何なのか...などと、常に先を予測しながらの行動で、大変なこともたくさんありました。しかし、祭り本番当日になってしまうとどれだけ準備をしても、必ず足りないものが出てきてしまい悔しい思いをしていました。

今までの5年間、悔しい思いをしなかった祭りはありません。でも、たくさんの方々と一緒に笑顔になれなかった祭りもありませんでした。そんな気持ちがあったからこそ、今も参加しているのかもしれないですし、来年も参加したいと思う自分がいるのだと思います。

これからやっさ祭りに人に優しい祭り委員会で参加する方にはぜひ、祭りの楽しさと一緒に踊る人との笑顔を忘れないで欲しいと思います。

そして、私達のように卒業しても、三原を離れても、やっさ祭りのために三原に帰ってきてほしいと思います。

そして、ボランティアセンターのドアを開けましょう、「ただいま〜」と！！

「人にやさしい祭委員会と私」

社会福祉法人みのり会 理事長 尾野 博子(三原市)

設立10周年おめでとうございます。

思い起こせば第1～2回に「車いす介助について」(交流研修会)に参加させていただいたと記憶しております。その後、勤務に追われて参加が難しくなり、ご無沙汰しておりました。

気づいてみますと今年で10年とのこと、他機関との折衝、ボランティアの調整、参加者の把握など関係者の皆様のご苦労は大変だったと思います。心から感謝申し上げます。

さて、今年の仲間たちに「やっさ踊り」の参加を募ったところ、希望者が少なく、どうしたものかと思案して「私も参加するから一緒に・・・」と誘ったところ、ありがたいことに10名の仲間が参加してくださいました。

過去32回も行われた「やっさ祭」ですが、今まで「やっさ」を踊ったことがない私、「トホホ・・・えらいこっちゃ、どうしよう。恥ずかしくて踊れるかな???手がだるくて踊れないかも・・・」と自問自答しての参加でした。

設立当初は、参加人員もそこそこで、ボランティアも施設職員や関係者のみで実施されていたものが、今回参加させていただき、

学生さんが主体性をもって活動しておられたこと、

参加される方が多かったこと、

多くのボランティアさんが笑顔で関わっていらっしゃる など、驚きました。

待ち時間が長いとお聞きしていましたが、さほど気にならず、ボランティアさんに車いすを押しただき「手がだるい・・・手が・・・」と年齢を感じましたが、年齢不問、踊りの上手下手不問で「やっさ踊りを一度は・・・」と思っていたので、長年の思いを達成することができました。

今後は仲間たちにも「楽しいので踊らなきゃ損よ・・・チャレンジしてみよう」と伝えていき



いと考えています。

ただ、残念なことに参加者が多く十分なコミュニケーションが持てなかったように感じています。ボランティアさん、学生さん、スタッフの皆様の温かいご支援があつての「やっさ踊り」です。仕事や勉強を続けながら大変とは存じますが、今後も継承されることを願っています。

また、少しでも協力させてもらえればと思っています。ありがとうございました。

「人にやさしい祭り委員会」はさまざまな“つながり”ができあがり、いまでも発展途上にある。それぞれが“緩やか”につながって、互いにその立場や役割を尊重しようとしている。その“つながり”は「出会い」から始まり、分かち合い、助け合い、そして“家族”のようになることもある。

「明日に架ける橋」チームに参加する人たちの中には、「命がけ」で参加される方も多い。参加のために、一年間を費やして体調を管理している方も実際にいらっしゃる。

“生きる”という“想い”に出会い、感じ、「こころ」の窓をすこしだけ開いて相手の「居場所」をつくり、ともにするという「やさしさの輪」を広げていく活動こそが「人にやさしい祭り委員会」ならではの取り組みでもある。



やっさ祭りではメインステージやチーム紹介に「手話」が大活躍！

要約筆記のみなさんもスクリーンに紹介文や案内を映し出して、暑さに負けず頑張っています。

4. 「人にやさしいまちづくり」の実現に向けて

1) 具体的に実現するために

「人にやさしい祭り委員会との出会いを通して」

医)仁康会 障害者地域生活支援センター
さ・ポートセンター長 長谷部 隆一

「人にやさしい祭り委員会」との出会いは、2000（平成12）年に遡ります。

1995（平成7）年の三原市障害者ニード調査から1999（平成11）年の障害者に関する第2次三原市長期行動計画（三原市障害者プラン）を障害当事者・家族を中心に、行政と福祉関係者が協働して作ることに初めて、三原市の精神障害者に関する地域福祉を考えていく契機となりました。それまで多くの自治体での障害者に関する「福祉」プランは、身体障害者と知的障害者の方に関するもので、精神障害者の方は「福祉」の対象ではなかったのです。三原市はその先駆的な取り組みによって精神障害者の方も障害者プランの対象となり、そのプランは全国的にも高く評価されました。

そのような地域の取り組みが背景にある中で、「人にやさしい祭り委員会」と「明日に架ける橋」チームの活動は、こころの病でさまざまな生活のしづらさのある人もふくめた、すべてのひとが三原の地域を代表する祭りである「やっさ祭り」に参加できる機会を作り出してくれました。

偏見や無知、無理解の目で見られることの多い精神障害者の方が、人がたくさん集まる「祭り」に出て行くということは、とてもとてもたいへんなことなのです。

ましてや地域のたいへん大きなイベントである「やっさ祭り」に参加するということはとてもハードルが高く、“勇気”がいることでもありました。

そのような状況の下、「やっさ祭り」を通して精神障害者の方々のことを少しでも市民のみなさんに理解していただき、啓発の一助になればとの思いから、法人に了解をとり、どういう形で参加できるかを法人内の地域支援会議でも協議し、当事者のみなさんから参加希望者を、また職員からボランティアを募り、事ある度に「人にやさしい祭り委員会」の報告をしながら準備していきました。

そして利用者と支援者という立場を超えて、さまざまな障害の枠や障壁(バリア)を超えて、三原のやっさ祭りが大好きな仲間同士として一緒に参加するという試みを行い、以降、毎年参加することになり、当事者のみなさんからもたいへんに喜ばれています。

この委員会の良さを整理すると、

準備段階から参加までの“過程”を大切にしていること、

参加する障害当事者・家族・ボランティアの意見を翌年の事業に反映して計画するなど、“協働”したものであること、

「顔と顔の見えるネットワーク」づくりができ、三原市の障害者のみなさんの“地域”生活を支援することにつながっていること、

などが挙げられます。

参加者の研修を位置づけ、楽しみながら障害の理解にもつながり、車いす用トイレ、段差の問題など、祭りを通して“地域”の課題も明らかになり、“協働”したまちづくりにもつながっているのではと思います。

いまだ精神障害者の方々の社会的な理解は遅々として進んでいない現状があります。しかし、この委員会は、障害に対する誤解や偏見をときほぐし、コミュニケーションの輪を広げてくれ、大きな力を与えてくれています。

この委員会で中心的な役割を担っている県立広島大学ボランティア部の学生の方々が、精神障害について知りたいと地域生活支援センター「さ・ポート」の見学をし、それを契機に「夢みなと祭」等のボランティアとして参加するようになました。それは現在も引き継がれ、新たな出会いの機会となっています。

これからもこの委員会や「やっさ祭り」への参加を通して、「一人の市民として普通に暮らせるまちづくり」実現につながることを願っています。

「参加できる環境を作り続けて」

森安 金次郎

私は、8年連続、「明日に架ける橋チーム」でやっさ踊りに参加しています。

参加し始めてから、“8月、やっさ踊り参加”という楽しみができました。

やっさ踊りに参加することは踊ることだけでなく、「明日に架ける橋チーム」で“会える人”がいることも楽しみになっています。

毎年、やっさ踊り終了後に「明日に架ける橋チーム」の解散式があります。そこで、人にやさしい祭り委員会のスタッフからの挨拶を聞くと、「来年も出よう」と思います。「やっさ祭りが終われば、夏が終わる」と思うようになりました。

今では、8月のやっさ踊りに向けて、日頃から健康に気をつけ、テニスをしたり、歩いたりもしています。それから、人にやさしい祭り委員会で作成しているやっさ祭りのビデオも繰り返し見て

います。何度見ても飽きず、ビデオ鑑賞は楽しい時間となっています。

現在、55歳。元気なうちはやっさ踊りに出続けたいと思っています。

これからも、やっさ踊りに“参加できる環境”を作り続けてもらいたいです。

「心うきうき、パラダイス」

三原ろうあ協会 桶本 恵美

三原ろうあ協会から毎年参加しています。

1. メインステージの手話通訳について

隊列がメインステージ前にきたときに、手話通訳者が一生懸命手話で私たちの事を紹介しているのが全て読み取れて、伝わるのって“すばらしい”です。

以前、メインステージにはなかった時は音のない世界で踊る私たちは祭りからの疎外感も感じていたけれど、現在は他のチームの紹介などもよく分かるので一体感を感じます。

2. 手話について

人にやさしい祭り委員会では参加者の研修会が行われ、それはあらゆる障害者とのコミュニケーションを学びます。私自身も聴覚障害者との関わりについて簡単な手話を交えて楽しく交流しています。

特別なものでない、誰もが伝えたい伝わりたい思いがあれば、伝わるのが発見です。

3. 活動についての期待と感謝

県立広島大学の手話サークルの学生さんとの交流も楽しくて、やっさに参加する度に手話を広めている気がします。

私達も他市のろうあ者に積極的に声かけ、やっさ踊りに誘いたいです。今年の人にやさしい祭り委員会DVDは字幕があり、手話もよく写っていて楽しいDVDになっています。多くの皆さんに見て欲しいです。三原やっさ祭り実行委員会の皆さんには特にね！！

皆さん楽しく 本当にパラダイス、心うきうきと弾けます。ありがとう。そしてまた来年も！！

「明日にかける橋に参加して」

三原市障害者支援センター

ドリームキャッチャー センター長 田中 清美

「人にやさしい祭り委員会」が“地域”に密着した取り組みをはじめて10年。おめでとうございます。私が三原の町で暮らすようになって13年になります。もちろんやっさ祭りには毎年欠かさず参加してきました。

そして「明日にかける橋チーム」に参加するようになって、もう7~8年になります。

「救護ボランティアとして参加しています。」といっても、一緒に踊って、はじけて、一年に一度の真夏の夜を思う存分楽しませてもらっています。

そしてやっさ踊りを通して多くの人たちと知り合えたことが私の宝物になっています。一緒に参加した人からお声をかけていただき、「元気だった」「今年もでようね」など、「明日にかける橋」仲間としてのつながりができています。うれしいなあ。

大きなトラブルも無くというより、「こんなに元気にはじけて楽しめるんだ」というのが素直な感想です。正直言って初めて参加したときは、障害のある人が夏の祭りに参加し、しかも踊ることは大変なことだろうと予想していました。

実際、脱水、発作、体力の消耗に備えて、本人や関係者が本番前から本番までいろいろ調整されています。祭りに向けての万全の体制作りが参加を支えているのだと思います。

参加できる“環境づくり”が大切だと、つくづく思いました。

三原に住んでいる人だけではなく、市外からの参加者も増えてきて踊り仲間もたくさん増えました。今後も三原から全国に向けて、やっさ祭りではじける「明日に架ける橋」のあふれるパワーを発信しましょう。もちろん私も参加し続けますのでみなさんこれからもよろしくお願いしますね。

「マナーと気配り」

有限会社 創意 代表取締役 熊本 庄三郎

2008年、人にやさしい祭り委員会の「明日に架ける橋」の活動を7月12日の研修初日から祭日本番・花火までをビデオの撮影を通して関りました。

「人にやさしい祭り委員会」の趣旨や方向性は、撮影に入る前から聞いていたのですが、「明日に架ける橋」についての詳細は聞いていませんでした。撮影を通して研修会に参加し体験していくことで解ってくるだろうと特に聞く必要もないと考えていました。

研修会での「車椅子」「手話」「コミュニケーション」「ガイドヘルプ」については、「なるほどね・・・」「そりゃそうじゃ」ということばかり。つまり誰もが出来ること、していること、できることで特別なことは何一つないということの再確認でした。

続いて、本番に向けてのグループ分けや踊りの練習を見ていて感じたのは、ヘルプする側、される側ではなく、スタッフも参加者もみんながお互いに気配りをしながら、同じ場所で同じ時間に、同じ目的に向かって活動している姿であり、みんなが愉しんでいるということでした。そして、そこにあるのは介助の技術的なことではなく、人と人がコミュニケーションをする時のマナーと気配りでした。

障害があればやはり不得意なこともあるのは当然です。器具や通訳が必要な人もいます。でも、それは私も同じです。他人に出来ても私にはできないことがあります。きっとみんな同じです。「得意・不得意」、「好き・嫌い」、それを日本では昔から「個性」と言ってきたはずなのです。

「明日に架ける橋」は、祭りに参加するための介助やヘルプをするチームではなく、個性を認め合い互いにサポート（応援）をしているチームであることを強く感じました。

ただ、問題・課題も感じました。今回参加していた人たちは障害の有無に関係なく積極的な人たちの集まりです。ですから、集まっても大きな問題は発生しません。また、外出や祭りに参加することに消極的な人もそれでいいと思います。楽しみ方は人それぞれですから。

しかし、障害を持つことやボランティアという活動への知識や情報のなさが生み出す偏見をどう無くしていくのか大きな課題だと思います。まだまだ偏見を持っている人は多いと思います。また、自分の考え方は情報のなさから生じてくる間違いであるということに気づいてない人がほとんどかもしれません。でも、立場を置き換えるだけで基本的なことはすぐに想像できると思います。

正しい知識を分かりやすい情報にして伝えることで、みんなが優しくなれば、ハード面でのバリアフリーはさほど大きな問題ではなくなってくると思います。

ハード（モノ）よりも“ハート（心）”が先行しなければ、ハード（モノ）は付いてきません。ルールや基準ではなく、「モラル」と「マナー」と「知恵」で愉しく過せる三原ができることで何かが変わる気がします。前向きに暮らす人が多いまちは、きっと明るい、暮らしやすいまち。そんな明るい三原に向けてみなさんの活躍を期待しています。

「人にやさしい祭り委員会と共に祭りに参加して」

第33回三原やっさ祭り実行委員会

副実行委員長 中川 正巳

明日に架ける橋チームが、10年前にやっさ祭りに参加をされ、その時から一緒にやっさ祭り実行委員会で、「やっさ祭り」の計画、運営を行ってきましたが、当初は「人にやさしい祭り委員会」って何????でした。お年寄り、障害者の方は、祭りを見る人という概念が強く、実行委員会で、あまり議題、協議には上がらなかったと思います。

それが「人にやさしい祭り委員会」が出来たことにより、運営だけの都合での計画から、参加しやすい、見学しやすい運営計画を考えるようになりました。

しかし、この考え方になるまでには、時間がかかりました。実行委員会の会議の中で「人にやさしい祭り委員会」の委員長さんの粘り強いご苦勞により、人にやさしい祭りの運営・計画が話し合われるようになったと思います。

これからは、祭りへの見物者を含めた、参加者全員へ「人にやさしい」ところを、人に優しい委員会と共に三原やっさ祭り実行委員会全体で伝えることが出来たら、「三原やっさ祭り」がより素晴らしい祭りになると思っております。今後とも、「人にやさしい祭り委員会」の力強いご協力をよろしくお願いします。

「出会い」が生み出すものは不思議である。ある時は“力”を、またある時は“癒し”を、またあるときは“夢”や“希望”を生み出してくれる。

“偶然”あるいは“突然”の運命的な「出会い」もある。しかし、「ひとにやさしい“まち”」づくりのために、積極的に「出会い」や「つながり」を生みだし、知恵と力とあつい想いを共有し、ともに刺激し合い、ともに学び育み、ともに“変わる”「環境」を、ほんのすこしの“きっかけ”と“気くばり”から始め、たゆまない努力と地道な積み重ねによって築き上げ、具体的に実現する取り組みが地域に重要であろう。

2) ともに「学び」、ともに「育ち」、伝え「育む」

「2008年 踊り担当となって」

県立広島大学ボランティア部

立畠 徹

私たちは、人にやさしい祭り委員会の踊り担当として、3回行った踊り研修会の企画や司会、踊りのグループ作り、隊列決め、アンケートの作成、はっぴやゆかたの用意など準備・企画段階から関わらせていただきました。

「どうすればより安全により楽しく踊ることができるか」、考えが行き詰れば委員長をはじめとする委員会メンバーからアドバイスをもらい、学生同士で何度も話し合い準備を進めてきました。

人にやさしい祭り委員会は、私たち学生の意見をきちんと聞いて、取り入れてくれたりアドバイスをくれたりするので、こうした経験はなかなかできることではなく、とても勉強になりました。

踊り当日には、参加者受付や花車・緊急車両の荷物積み込み、各控え室へはっぴ・ゆかたの準備、各踊りグループのリーダー・サブリーダーを集めミーティングを行い注意事項の説明や出陣式の打ち合わせ等を行いました。安全に踊りを成功させるためにはリーダー・サブリーダーと委員会スタッフの連携が重要なのでこのミーティングでみな真剣に話をしました。

出発直前に行った出陣式では委員会メンバーやリーダー・サブリーダー、救護の紹介や「やっさ

やっさ」の掛け声の練習をし、全員が今すぐにでも踊りだしたいほど気持ちは高ぶっていきました。

わいわいがやがやと待ちきれない様子のおみなを出発地点まで誘導し、踊り始めるとみなさん笑顔で元気よく踊りはじめました。そして隆景広場の入口へさしかかりました。去年とは違い、隆景広場が休憩地点になったため、そこへ休憩に入る私たちのチームとそこから出発する別の踊りチームが入れ違いになり混乱が起きやすい地点だとあらかじめ予想されていたので、私たちはどうにか隊列を崩さず、安全にスムーズに踊ることができるようにとも気を張っていました。そして、各グループリーダーやフリーと協力し、200人近くのこの大規模な「明日に架ける橋チーム」を誘導していきました。

休憩地点では、隊列の後ろにある花車から飲み物を出し、隊列の中を走り回って飲み物を配りました。夕方とはいえ日差しが照りつける暑い中、みなさんが頑張っていていたので、水分補給をして一休みできたようでした。予想していたような混乱もなく無事に隆景広場を出発できました。

駅前のメインステージ、私たち「明日に架ける橋」チームは目一杯の笑顔でアピールし、踊りながらサンシープラザへ帰ってきました。長い踊りコースを障害がある人もない人も一緒になって笑顔で踊り続ける姿はとても力強いものでした。

踊りが終わった後、参加者の方たちから「ほんとに楽しかった」「来年もまた参加するよ」という声を聞き、涙が出そうなほどうれしかったです。何ヶ月も準備をしてきた苦労が吹き飛んだ瞬間でした。

来年度の課題として申込用紙にはっぴ・浴衣希望の欄をつくる、物品の不足がないよう数を確認する、はっぴセット・ゆかたセットの予備を用意する、リーダーミーティングのときスタート地点への行き方を細かく確認するなどが挙げられました。来年は今年よりもより良いものにするために、反省をしっかりと活かしていきたいと思います。

「2008年やっさ祭り」

広島県立保健福祉大学ボランティア部 0G
独立行政法人 国立病院機構 広島西医療センター(廿日市市)
理学療法士 桑田 麻衣子

私がやっさ祭りに参加したきっかけは、大学2年生の時に所属するボランティア部の友達に誘われて、踊りのボランティアとして参加させて頂いたことです。何故かチームのサブリーダーに抜擢され、ほとんど何も分からない状況での祭り参加となりました。研修会にて踊り中は何事も「報告・連絡・相談」が重要だと教わり、緊張が募ったのを覚えています。踊り当日はリーダーがしっかりした方で、問題なく踊り終えることが出来ました。終了後、同じチームの方に「お世話になったね。ありがとう。」と言って貰えてすごく嬉しかったです。「明日に架ける橋チーム」は高齢者・障害を持った方の参加も多く、多くの人が必要である事が分かった年でした。

私は大学1年生の時は大学のチームとしてやっさ祭りに参加したのですが、大学のチームは自分が踊りきることに集中すれば良いので気が楽です。しかし、色々な手助けを必要とされる方が多い「明日に架ける橋チーム」での踊りは、他の人の体調や気持ちを一番に重視して踊らなければなりません。とても大変ですが、祭りを通じて自分より他者を思いやることの尊さを学ぶことが出来ました。

2年生のときの参加以後、3年次には「人にやさしい祭り委員会」踊り担当メンバーとして、4年次には学外実習と卒業研究の合間を縫って、又、卒業して働きだした後も0Gとして2回ほど祭りに参加させて頂きました。毎年祭りに参加していると、次第に当事者と仲良くなる事が出来ま

す。やっさ祭りのために三原に帰ってくると、「元気だった～?」「今年も楽しく踊ろうね。」と声を掛けていただくことが増え、祭りのできた大事な縁が途絶える事無く続いていることに喜びを感じます。

やっさ祭りは、委員会メンバーとして祭りをサポートしている後輩達や、ボランティア部 OG が集合する数少ない機会となっています。OG として参加を続けている今では、現役ボランティア部のときには見えなかった色々な部分が見えてくるようになり、また経験を重ねることで得られた教訓や反省を活かしながら、祭りに参加できているのではないかと思います。

私は学生の頃から、「社会人になってもボランティア活動を続けたい」「学生時代を過ごした三原の人々との繋がりを絶やしたくない」という気持ちがあったため、毎年やっさ祭りに参加させて頂けることを本当に感謝しています。

いつの間にか社会人となり、学生時代のようにボランティアに携わることの出来る時間が少なくなりましたが、今後も可能な限り祭りに参加させて頂こうと思っています。これからもよろしくお願ひいたします。

変革はいつの時代もエネルギーに満ちた若者の、新鮮で純粋な取り組みから始まることが多いものである。

学生ボランティアの活動はたいへん大きな衝撃であったといえる。市民のハートに直接訴えかける取り組みであった。

同時に、今までの“おとな”の取り組みを根底からゆさぶるものであったといえるのではないだろうか。学生ボランティアの取り組みを見て、地元の“おとな”は、これまでの自分たちの活動をふり返り、マンネリ化していなかったか反省し、新たな時代を予感し、三原の魅力と底力を、みんなが本来持っている力強さを再発見する機会を与えられたように思われる。

「人にやさしい祭り委員会」の取り組みも、学生ボランティアの存在を抜きにしては成り立たない。当事者の想いと共鳴した学生ボランティアがともに響き合って新たな旋律をかなえている。「感じる力」と「具体的に実現する力」が相まって「ひとにやさしい」まちが築き上げられて行こうとしている。

「人にやさしい祭り委員会」における学生ボランティアの今年の活躍の一旦を紹介し、どんな体験をし、なにを学び、どのように伝え育てていくのか、それを三原に住む“おとな”はどのように育んでいこうとしているのかを考えたい。

学生ボランティアにとっては、すべてが「学び」である。彼らは医療・福祉の専門職として机の上で勉強をしている“学生”ではあるが、「人にやさしい祭り委員会」では、まさに“実践”を要求されている。ひとりの“人間”として、障害などの生活のしづらさを持った“人間”に^{あいたい}相対することが求められる。そこには“学生”とか“専門職”などの肩書きや“地位”、“名誉”は通用しない。ましてや妥協や甘えは許されない。

しかし知らないこと、分からないこと、は数限りなくある。失敗も山のようにある。それを責めるのではなく、受け止めることが“おとな”には求められている。むしろ失敗することを^{はくく}意図的に勧めるような指導も必要なときもある。反省しなければならないのは“おとな”の教え育む力のなさではないだろうか。

「学び」の中から多くの学生が育っていた。その学生が社会人となり、今度は学生にアドバイスができる先輩として、また専門職として、社会人の視点から、あらたな力を身につけて参加してくれている。

3) 「我がこと」からの出発

「明日に架ける橋チームに参加して」

広島県立保健福祉大学ボランティア部 OG
藤田保健衛生大学病院(名古屋市)
言語聴覚士 石黒 百合子

私は大学最初の夏、一ボランティアとして 明日に架ける橋 チームに初めて参加しました。チームのパワーに圧倒されながらも、とても楽しくおもしろく、有意義な経験でした。

『こんな祭りを自分の手で作りたい』、そう思い、「人にやさしい祭り委員会」に参加、今年で6年目のやっさとなりました。

明日に架ける橋 チームには様々な方が参加します。手足に障害を持つ方、知的障害を持つ方、視覚や聴覚に障害を持つ方...そして沢山のボランティアのみなさん。『祭りに参加したい』、その想いを支えるために、「人にやさしい祭り委員会」は動いています。

委員会の仕事は多く、必然的にそこには「責任」が伴います。しかし、私たちは「責任感」や「義務感」のために委員会に参加しているわけではありません。

何より『自分が楽しいから』『自分がやりたいから』参加するのです。祭りが終わった後、参加者の仲間たちがくれる笑顔と言葉、「楽しかったよ」、「ありがとう」、「また来年よろしくね」。これが原動力です。

やっさまつりに参加すると、祭りの夜を一緒に楽しむ仲間たちとの出会いにより、たくさんのことを学びます。やさしさ、強さ、人生を愉快地に過ごすコツ...彼らから学んだことが、今の自分を構成しているのだと、胸を張って誇ることができます。

また、一年をとともに過ごす委員会の仲間たちからも、たくさん力を得ます。時にやさしく、時に厳しく支えあう関係は、家族のようです。

私は「人にやさしい祭り委員会」に参加したことで、もうひとつの家族を得ることができ、三原が「帰る」場所になりました。参加者に楽しく参加していただくために重ねてきた会議や話し合いの経験が自分の内面を見直すきっかけになりました。

私にとっての【夏の風物詩】は、やっさまつり、明日に架ける橋 チームへの参加に他なりません。これからも夏の夜には、仲間たちや家族が待つ場所に帰って来ますので、みなさんよろしくお願いたします。

市外から見た三原の「人にやさしい町づくり」

- 「明日に架ける橋」チームに参加して思うこと -

府中市障害者生活支援センター は〜と&は〜と 相談支援専門員
障害福祉サービス事業所 おおむらさき 施設長 平岡 辰士

「ひとにやさしい祭り委員会」の鑑本さんから「やっさ」へお誘いを頂き8回を重ねました。踊りの基本を外れ邪念も忘れむちゃくちゃに踊ることで、貯め込んでいたストレスや色々なしがらみを忘れてしまい、胸の中にある「どうにもやりきれない塊」のようなものが溶けていく感覚はなんとも言えない開放感です。

その開放感にすっかり嵌まってしまい、ぎっくり腰の



まま参加し事務局の計らいで私自身が車いすで踊った年もあり(写真右下 前列中央の車いす)、ますます「やっさ」の懐の深さに魅力を感じるようになりました。



府中からの参加者は盲導犬を伴う人や車いすを利用している人、急な場面展開での判断に支援を必要としているなど様々ですが、踊り直前まで働いている人も含まれるため、「明日に架ける橋」チーム出発直前の参加となりたいへん迷惑をお掛けし、恐縮しております。

事前の打ち合わせにも参加せず、遅れてくる府中グループのために準備万端整えてお待ちしておりますが、準備にあたり駐車場、衣装、スケジュール、体調管理、誘導、飲み物、トイレ、緊急時の対応だけでなく参加者のモチベーションやテンションを最高潮にまで盛り上げること、祭りの高ぶりの終わり方を含め具体的な課題に対して大変綿密な打ち合わせが行われているのだらうと思います。

実は「やっさ」に参加し続けているのは、その準備過程のことが非常に気になっていることと、もう一つは三原の「町づくり」についてうらやましくさえ思っていることがあるからです。

「やっさ」への準備過程で三原の「人にやさしい町づくり」が毎年、回を重ねるごとに一つひとつ検証され、その度に新たな仕掛けが考えられていると踊りながら肌で感じます。

「やっさ」に参加して胸の中の塊のようなものが溶けていく解放感は、「人にやさしい町づくり」を自分の事として取り組んでいるスタッフの皆さんの存在によるものだらうと思います。

もう一つは、全国でも珍しい三原独自のケアマネジメント研修が継続していることや、ほとんどの市町がコンサルタントに作らせる障害者福祉計画を市民が自分たちで作り上げていることです。

派手さはありませんが、こうした地道な取り組みが「人にやさしい町づくり」の裾野を広げ続けているように感じますし、「やっさ」に参加した時の安心感と心地よさを与えてくれるのだとも思います。

「人の為」と書けば「偽り」となります(相田みつお)が、人(他人)の為ではなく、暮らしている自分達の立場で考えることや「やっさ」の取組の具体的な困りごとから町づくりを考えることが三原の取り組みを「偽り」ではなく「本物」にしているのでしょう。

府中にも夏祭りのドレミファフェスティバルがあります。私たちはこの祭に参加しないで「やっさ」に参加していますが、三原の取り組みから府中に暮らす自分達の「町づくり」を自分の事として本気で取もうとせず、他人任せにしたり、出来ていないことを他人のせいに行っていることに気づきました。

また、生活の中から住んでいる人の具体的な困り事を把握し、そこから町づくりをすることを学びつつあります。

県内外からも参加する沢山の人がことに気付き、「明日に架ける橋」ウィルスが府中だけでなく各地に飛び火して行く事を考えると、何だかワクワクとしてきます。

ボランティア(volunteer)の語源はラテン語の“志願者”であり、古典的な定義において今日的な定義に追いつきも共通するものは“自発性”であらう。

一方、“先駆性”や“自己実現性”などがボランティア活動の新たな特徴として指摘されるようになっている。“先駆性”とはボランティア活動が既存の社会システムには無く、時代を見越した先進的な役割を担うことから指摘されるものであり、またボランティア活動が参加する人の自己実現を果たす性質に注目して“自己実現性”の概念を指摘するようになってきている。

「人にやさしい祭り委員会」の活動は、その源流から現在に至るまで、ボランティア活動の“自

発性”や“先駆性”、またそれぞれが「学び」「育つ」という“自己実現性”も報告によって確認することができた。

「よそ事」「他人事」にせず、「我がこと」からスタートしなければ「本物」にはならず、“力”を生み出すこともできない。

自らが感じ、自ら志して縁を結び、縁に従って行動する「志縁」こそ、「支援(サポート)」する際の重要なポイントであり、このことは「環境」づくりで最も配慮すべきことのひとつである。

また、ボランティア活動は一方通行のものではない。自分が支援しているつもりであっても、ふと気づくと支援したと思っている以上に、相手に支えられ、相手から教えられ、癒されていたという「相互性」の経験はボランティア活動において、よくあることである。

お互いがそれぞれの立場や役割や個性を素直に認めあい、尊重し、ともに手をたづさえて生きて活かされていく「共生(ともいき)」の地域づくり。

「ともに学び、ともに育ち、ともに変わる」ことなくして三原が本来的に持っている

“魅力”や“底力(そこちから)”の再発見にはつながらない。

「やっさ祭り」を通して、「完全参加と平等」から始まっている「人にやさしい祭り委員会」の取り組み、「人にやさしいまちづくり」の基本はここにあるのではないだろうか。

公の支援(公助)と地域住民による「お互い様」という助け合い(共助)の絶妙なミックス、そして自らを助け、自らを助ける“力”を育てる視点から紐解くことが重要であると考えます。

5. 「市民祭に障害の有無は関係ないさ」

- 人にやさしい祭り委員会の取り組みを全国の視点から評価する -

愛知淑徳大学医療福祉学部

教授 谷口 明広

私は「三原やっさ祭」および「明日に架ける橋チーム」をこよなく愛している車いすに乗った障害をもつ参加者として、書かせていただきます。私も「やっさ祭」に参加して6年目になります。そのきっかけは、三原市社会福祉協議会が運営している「ドリームキャッチャー」という障害者地域生活支援センターで「ピアカウンセラー養成講座」を祭期間中に開催したことでした。あれから6年間、全国の何処に居ても、お盆前の週末には三原へ駆け付けることが年間プログラムに明記され、今回は家族4人を始め、京都から総勢7名で参加してしまいました。



「やっさ祭」の魅力は、色んな職種の人たちが、自分のストレンクス(売り)を前面に押し出しており、それを誰もが否定することなく、全体的な力としているところではないかと感じています。要するに、「誰のたけに行動している訳でなく、皆んなで楽しく祭りたい」という本来のボランティア精神が息衝いていると感じています。

他の地域でも「祭り」は、町おこしや村おこしの起爆剤とされ、地域福祉的にも研究されています。しかしながら、大半の祭りでは、グループ(連)を作って「祭り」に参加するだけで、「楽しかったね。良かったね」というグループ個々の喜びを感じていただくことが重要課題となっています。それも、障害者福祉の関係者が「祭運営委員会」などに必要以上に頭を下げて、ようやく「お客様参加」という役割が与えられているのです。1981年の「国際障害者年」で提唱したスローガンの一つである『完全参加』は、お客様の参加ではなく、

企画立案の段階から障害をもつ人が参加しなければならないとしています。このようなことを認識していない執行部は、障害をもつ人たちを市民ではなく、「特別な者」と見ているのかも知れません。

「祭り」は、もともと「市民の癒し」を目的として始まったものが多いようです。私が住んでいる街である京都には、日本三大祭の一つである「祇園祭」があります。「祇園祭」は、平安時代に流行した疫病を撃退するために行われたもので、非常に格式が高く、車いす使用者のみならず、視覚障害をお持ちの方、更には女性の参加さえ認めていません。

その点に関して、「やっさ祭」が市民主体のものであることは、歴史を見ても明らかなことです。歴史を振り返ることは、現在を知り、未来を予想することだと思います。戦国時代から続いていた「やっさ祭」の歴史は、一旦は途切れていたはずですが、それを復活させたのも「市民の地域力」だったと感じています。市民が持っていた“さみしさ”や“孤立感”、“むなしさ”や“空虚感”が最大のエネルギーとなり、暴動や闘争という戦闘的方向ではなく、癒しという方向である「祭」というものが復活したと考えています。私のような京都の人間を感じるよりも、三原に住んでおられる皆様にこそ、学んでいただきたいと心から願っています。

市民主体の「祭」だからこそ、現実として「市民レベルのノーマライゼーション」が具現化できるのではないのでしょうか。祭りの本番は真夏で、路面温度は60度近くになるでしょう。体温調整が困難な頸椎損傷の方が、真っ赤な顔をして踊っています。医療関係者が見たら、踊ることよりも屋外に出ていることさえ、考えられないのかも知れません。しかし、本人は「死んでも良いから踊りたい」という心意気なのです。「何故に踊りたいのか」という疑問を何故に持つのか？を逆に問いたくなる。

『三原で生まれ、三原で育つ、三原に来て、三原に暮らす、三原で生きて、三原で朽ちる』、そんな思いの「三原人」にしか、「やっさ祭」の一体感が感じられないのだろう。「祇園祭」のように観光化されていない「やっさ祭」は、参加型イベントの真骨頂と言えます。「祇園祭」を真似ようと思う人たちは、どこの自治体にもいないと思うし、そう簡単には平安時代からの文化財が揃うこともないだろう。しかし、「やっさ祭」は、誰もが真似のできる市民祭なのです。ずっと昔から障害をもつ人たちを参画させるように努力され、「祭という人生のステージを共有する」という考え方を三原市民の誇りとして全国に発信してもらいたいです。「三原人になりたい」という誇り高き気持ちに、障害の有無は関係ないと心から叫びたい。フレー！フレー！「やっさ祭」ありがとうございました。

2008 第33回三原やっさ祭り 人にやさしい祭り委員会実施概況

委員長 岡田 麻里

第33回 人にやさしい祭り委員会



着付け	事前研修	踊り	露店・観音席	花火	送迎	救護
堀本 (三原V連)	岡田 (みはらケアネットワーク)	立畠 (県立広島大学V部)	竹内 (県立広島大学V部)	垣内 (県立広島大学V部)	崎田 (三原市社協)	水野 (みはらケアネットワーク)
山田 (三原V連)	古山 (みはらケアネットワーク)	高口 (県立広島大学V部)	山下 (県立広島大学V部)	薦田 (県立広島大学V部)	田坂 (三原市社協)	北谷 (県立広島大学OG)
吉田 (三原V連)	吉川 (みはらケアネットワーク)	竹下 (県立広島大学V部)	金原 (県立広島大学V部)	山本 (県立広島大学V部)	永原 (三原市V・市民運動部-地タ)	亀井 (呉共済病院志海分院)
		田積 (県立広島大学V部)		小川 (県立広島大学V部)		安永 (呉共済病院志海分院)
		平 (県立広島大学V部)				吉川 (みはらケアネットワーク)
		(緊急車) 本田 (三原市社協)				田中 (ドリーベンチャー)
		(花車) 岡林 (三原市社協)				高橋 (小泉病院)



グループ名	人数	リーダー	サブリーダー
A(さわやかモーニングう〜)	36	茨木祥季	垣内良太 山本成実
B(チームあさがお)	22	森平浩三	竹下純加 三宅亮
C(仁康会)	28	山本恵美子	末久由似
D(Dream To やっさ)	39	石井泰浩	竹内優美 橋本政志
E(デフのWA)	34	光成英治	桶本恵美
F(は〜と&は〜と)	30	高山明子	藤村浩司 藤原知帆

フリー
岡田麻里(委員長)
鑑本智昭(修理)
長谷部隆一
石黒百合子
山下美紀
八尾朋代
高口兼史
立畠徹



記録
熊本
末本
吉田

車両関係
本田(緊急車)
岡林(花車)

1. 実施場所・会場

- ・サン・シープラザ4F (集合・解散・救護・事務局)
- ・人にやさしい観覧席 (三原駅前見学席)
- ・情報提供 手話(メインステージ)
要約筆記(バスロータリー南側)
- ・露店散策ガイド (やっさ祭り会場 周辺)
- ・花火会場 (花火本部横)

2. 実施日時

2008年8月8(金)9(土)10(日)

3. 事業目的

障害者・障害児・高齢者・健常者・ボランティアを問わず、誰もが参加できるサポート事業により安全・安心の三原のまちづくりを目的とする

- ・露店散策ガイド 8/8(金) 8/9(土)
- ・花火見物ガイド 8/10(日)
- ・踊りチームサポート 8/9(土)
- ・人にやさしい観覧席(駅前) 8/8(金) 8/9(土)
- 情報提供事業
- ・手話通訳 8/8(金) 8/9(土)
- ・要約筆記 8/8(金) 8/10(土)

4. 予算総額

290,000円

5. 外部協力者

三原市社会福祉協議会
三原市ボランティア連絡協議会
三原市福祉のまちづくり推進協議会
広島県立大学ボランティア部

6. 動員数

運営スタッフ：20名
ボランティア等含む総動員数 300人

7. 決算概況

予算 : 290,000円
支出総額 : 257,023円(支出予定)
差引 : 32,977円(予算残額)

主な理由：今年度は、踊りの飾り付けをシンプルにしたこと、クリーニング代をより安くしてもらえるようにしたため、踊り必要物品費とクリーニング代が削減できたため。

8. 実施内容と課題点（反省点）・その対策

1) 研修会

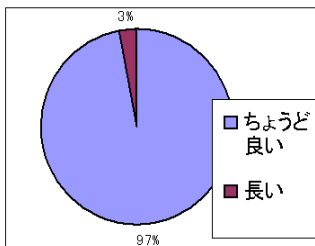
担当者：桑田・古山・岡田

2008年 やっさ祭り研修会のアンケートまとめ 第1回研修会（7月12日実施）

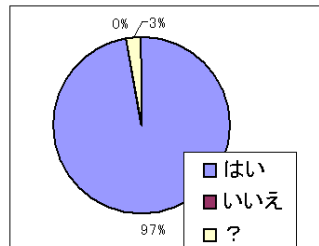
内容：手話・ガイドヘルプ・車椅子・コミュニケーションについての勉強会 etc

1- アンケート集計結果まとめ 参加人数：40名 有効回答数：35名（88%）

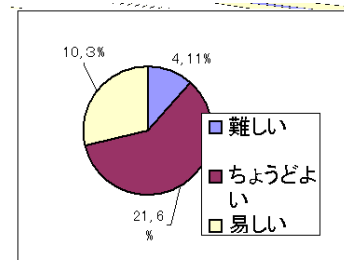
研修会の時間について



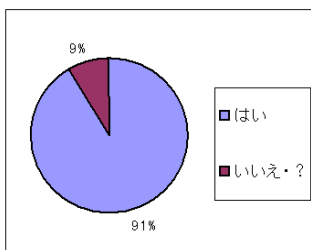
勉強になった



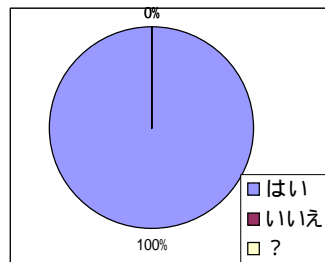
研修会の内容について



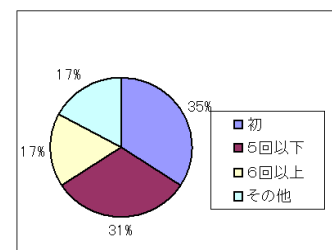
他の参加者と仲良くなった



来年も研修会の参加を希望する



やっさ祭りへの参加回数



1- 意見・感想・要望

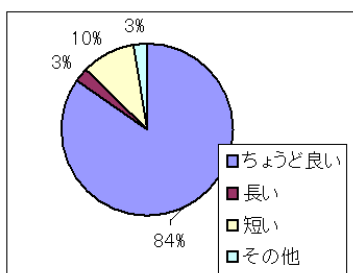
- ・休憩と研修の時間配分がちょうどよかった。 ・プログラムの位置が、前の方がよかった。
- ・今回は踊りの練習が何回かあるのがいい。 ・参加意義の確認ができて良かった。
- ・ガイドヘルプやコミュニケーションなど、普段教わる機会のない事も教われて良かった。

第2回研修会（7月19日実施）

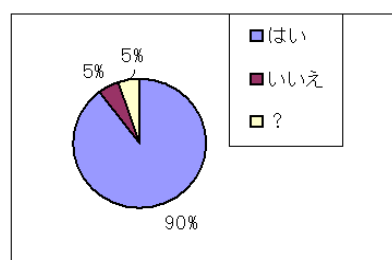
内容：たすき作り・踊りコース下見（雨のため実施できず）・踊り練習

2- アンケート集計結果まとめ・・・参加者数：57名 有効回答数：39名（68%）

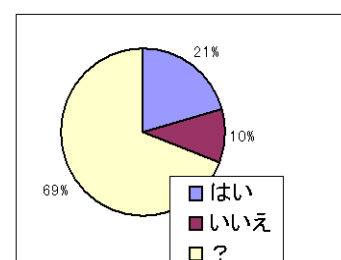
研修会の時間について



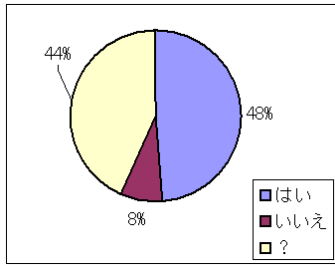
他の参加者と仲良くなった



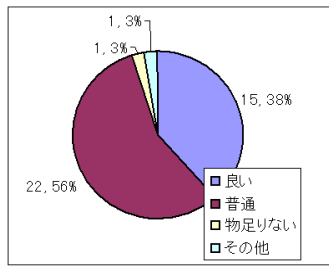
コースを歩いてみて勉強になった



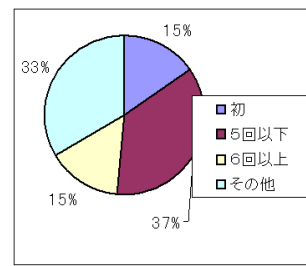
また来年もコースを歩いてみたい



研修会の内容について



やっさ祭り参加回数



2- . 意見・感想・要望

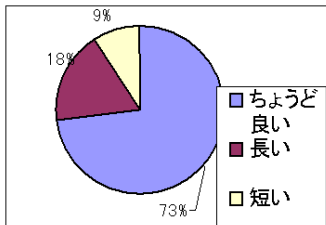
- ・雨で下見ができなかったのが残念。 ・集まる人が少ないので隊列が組みにくい。
- ・車いすを隊列の前に出すと言われていたが、車いすの方たちに意見を聞いてみたのか？
企画のところから当事者の方たちも参加して作っていきと良いと思った。
- ・申し込み時に希望グループを聞き、グループの旗やたすきはそのグループで作ったら良いのではないか。

第3回研修会（8月2日実施）

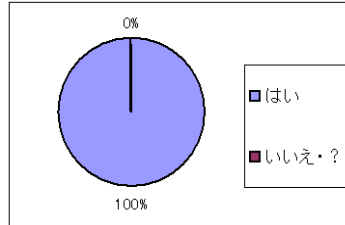
内容・・・グループ・隊列決め・コース説明・踊り練習 etc

3- ,アンケート集計結果・・・参加人数：106名 有効回答数：22名（21%）

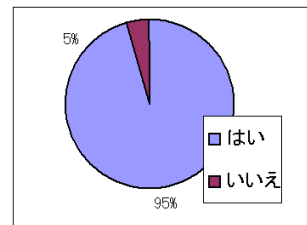
研修会の時間について



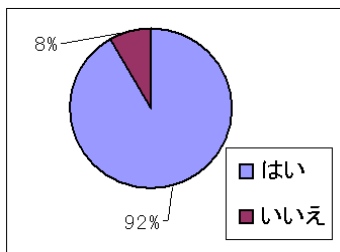
他の参加者と交流が出来た



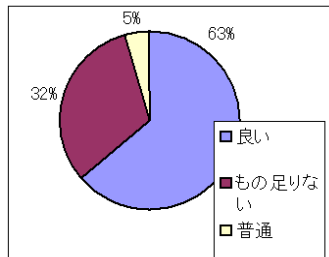
祭り本番への意欲が湧いた



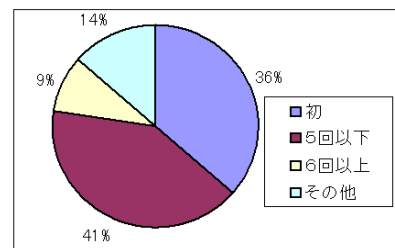
踊りが上達した



研修会の内容について



やっさ祭り参加回数



3- ,意見・感想・要望

- ・皆と一緒に参加して本当に良かった。また来年も参加したいと心より思った。
- ・いろんな人に知り合えて楽しい。
- ・今年もケガなく楽しい祭りにしたい。
- ・がんばって体調を崩さず踊ろうと思う。

研修会のまとめ

全研修会を通じて様々な意見が出ましたが、「楽しい」「勉強になった」「また来年も参加したい」という意見が多く、概ね講評のうちに研修会が終了できたと考えられる。

「大学生と交流できた」「学生主体の研修会でよかった」という意見もあり、研修会参加者がふだん接する機会の少ない大学生との交流を楽しんでいたことが伺われる。

研修会の内容ですが、今年は踊りのグループ分けに関して、「グループが決まってから、たすきを作るといったグループの団結力を高める作業が行いたかった」という意見があり、早めに自分のグループが決定して欲しいという要望も挙げられた。

研修会参加者数においては、初回・2回の研修会と数を重ねるごとに参加者の数が増えていき、最後の研修会では100名を超える参加者が集まった。最後の研修会では祭り1週間前ということもあり、やる気が増したという意見が多く挙がっている。

しかし逆にいえば、最後の研修会までなかなか参加人数が集まらず、人数がそろわないグループは踊りの隊列確認が祭り当日まで出来ないという状況が出来ている。

第2会研修会の踊りコースの確認については「雨でコースを実際に歩くことが出来ずに、残念だった」という意見が寄せられ、研修会の内容が天候に左右される場合は雨天のスケジュールも立てておく必要があると考えられる。

「人にやさしい祭り」を作り上げるためには、参加するすべての人々に安全で楽しく祭りに参加できる必要がある。

人にやさしい祭り委員会メンバーや多くのボランティアの協力が不可欠となるが、当事者の方々が満足して祭りに参加できることが何より大事である。

真夏の夜に総勢200名近いメンバーがひとつのチームとして群聚の中で踊りを踊る。しかもチームの参加者は障害を抱えている方が多いのが特徴である。

参加者の中には体温調節が難しく、人より多く水分を必要とする方や、コースが分からずに迷子になる危険がある方もいらっしゃる。リスクを抱えながらいかに「安全で安心して踊るか」については当事者やボランティアの声を一つ一つ拾い上げ、問題点や課題点を見つけて改善していくことでリスクを減らすことが出来る。

限られたマンパワーをどこに集中的に配置すべきかについても、起こりうるリスクをあらかじめ予測して対応することで、祭り当日に大きな事故に発展することを防ぐことが出来ると考えられる。

過去に起きた問題点や課題点を改善し、よかった点はまた来年度に活かすことで、毎年よい祭りを作り上げていく努力を重ねる必要があると考える。

今年度を実施したアンケート結果も、参加者の声として来年度以降に活かしていくことを切に望んでいる。

2) 踊り

担当者：高口、竹下、田積、立畠、平

実施内容

A) 準備について

- 参加申込書の改善
- 踊り研修会の企画と司会進行(3回実施)
- 踊りのグループ作り、隊列を決定
- 踊りコースの地図を作成
- 参加者名簿の作成
- アンケートの作成
- はっぴやゆかたなど必要物品数を確認し用意

B) 当日の実施内容

- 参加者の受付、体調確認
- 花車・緊急車両へ荷物を積み込み
- 各踊りグループの控え室へはっぴ・ゆかたを準備
- 各踊りグループのリーダー・サブリーダーとのスタッフ・ミーティング
- 注意事項の説明と出陣式の打ち合わせ
- 踊り中の体調確認、安全確保、隊列の誘導、休憩地点での飲み物の配布
- 踊り終了後、体調確認、帰宅の支援、はっぴ・ゆかたの回収

感想

去年とは踊りのコースが変わり、休憩地点である隆景広場への出入りで他の踊りチームとすれ違ふときに混乱が起こるかもしれないと予想されていたが、多くのスタッフと参加者のみなさんで協力しスムーズに出入りすることができ、本当によかった。踊り終えてから、参加者のみなさんが「楽しかったよ」「来年もまたくるけんね!」と口々におっしゃってくれたとき、何ヶ月も準備してきたよかった、また来年がんばろうと心から思えた。この「人とのつながり」をこれからも大事にし、来年は今年以上のものにしていきたい。

次年度の課題

- 研修会で一般の学生ボランティアと学生委員会スタッフを服装で区別できるようにする
- はっぴセット・ゆかたセットの予備を用意する
- リーダー・サブリーダーミーティングのときスタート地点への行き方を細かく確認する、などが挙げられた。

「明日に架ける橋チーム」の参加者数の減少傾向：踊りへの参加者200名と昨年度に比べて減少傾向にあった。また、リピーターが多く初参加者の割合が少ない。

(その対策)：

ビデオ、報告書の作成をおこない今年度の活動をPRしていくことによって、地道に来年度の

初参加者を増やしたい。一方、寿波苑はじめ町内会チームと福祉施設のコラボレーション(協力)、あるいは子ども会チーム等の中で車いすを使用した高齢者や障害者の参加が複数みられた。また、名古屋、京都、山口のように他府県からの参加者や、尾道市、府中市、竹原市、広島市、庄原市など、県内各地からの参加者が増加している。これは「明日に架ける橋」の地域への波及効果と思われる。このような現象も促していきたい。

3) 要約筆記

スクリーンの設置について

スクリーンの設置は実行委員会でしていただいたが、少し低かったので踊り手にかくれて下半分が見えにくかった。来年はもう少し高い位置に設置したい。

立ち入り禁止区域

立ち入り禁止のロープを張ったが、一般の方・通行人・写真撮影者がそれを乗り越えて入って来てプロジェクターの前を横切り、スクリーンに影が映ったので、来年は立ち入り禁止を徹底したい。

踊り紹介文未提出

踊りのチーム紹介文が未提出のところがあり、期日までに揃うとありがたい。

プロジェクター暑さ対策

炎天下で長時間使用したため、機器の発熱と高い気温のためにプロジェクターが使用不可能になった。

(その対策)

立ち入り禁止を徹底するため、ロープではなく、パネルなどの使用の検討可能であれば実行委員会の設営係の方が巡回し、立ち入り禁止区域へ入らないように呼びかける。

スクリーンの下端が地面から 150cm のところに設置。

プロジェクターに対する暑さ対策を徹底するため、来年は扇風機等で熱対策を考えるか、予備のプロジェクターを用意。

上記の具体的な打ち合わせを担当者同士がするため、7 月後半に行われるやっさ実行委員会に参加する、あるいはやっさ実行委員会担当部署と個別に事前協議を行う。

4) 人にやさしい観覧席

当日必要物品の管理

イス・仕切り・ロープなどの保管場所・数・並べる場所などの確認を当日に行ったため、担当者に上手く伝わっておらず現場で混乱が生じた。

気分不良者(熱中症)への対応

人にやさしい観覧席近くの栈敷で踊りを観覧している最中、気分不良で倒れた人が出た。本部の救護室にはあいにく看護師が席をはずしているところであった。スタッフは熱中症だと判断し、冷たい水を準備し(近くのローソンに買いに走った)、救急車を呼び病院に搬送するなど速やかな対応をとり、事なきを得た。

また、救護室にベッドが設置されていなかった。よって三原市ボランティア・市民活動サポートセンターよりストレッチャー(バスタオル・タオルケット)を急遽 11 日に設置した。

(その対策)

人にやさし観覧席への担当者になった者は、祭り前日に実行委員会の担当者と顔合わせおよび具体的な場所・必要物品や並べる段取りなどの打ち合わせをする。

今回は、赤十字奉仕団や災害ボランティアなどを経験した熟練ボランティアによる迅速な対応により大きな問題にならず対応できた。今後、このようなことが起こる可能性に対するスタッフの認識を高める、熱中症者が出た際の初期対応ができるよう、人にやさしい観覧席に冷たい水とタオルをあらかじめ準備しておく。

緊急時に迅速かつ適切な対応ができるようスタッフに周知徹底する。

緊急事態への速やかで適切な対応ができるよう、来年の救護所の備品等の確認をするなどやっさ実行委員会における機能の見直しと強化をする。

5) 手話通訳

ヘッドイヤホンが聞こえないトラブルが発生した。ステージでの手話通訳者の立ち位置が危険、またステージへの階段がステージ担当スタッフや来賓と共有しているため、スムーズに昇降できないことがあった。ステージ下に場所が確保されていなかった。

(その対策)

実行委員会ステージ担当スタッフと手話通訳者の事前の打合せ等必要性。

「手話通訳者席」としてステージ下に椅子を3つ準備

6) 花火

担当者：垣内、薦田、小川、山本

実施内容

A) 準備について

参加者が決まり次第に移動のための隊列表を作成

送迎が必要な人は確認しておく

花火見物の支援に必要なもの（懐中電灯、たすき等）をチェックし準備

B) 当日の実施内容

当日に出席・欠席等の変更がある人を確認

荷物がきちんとあるかチェック

送迎を希望される方には何時に誰が何処に迎えに行くのか確認

参加者が集合場所に到着し次第、体調の確認、ボランティアとペアリングを実施

参加費を未払いの方は徴収

全員が集合場所に集った後、花火および注意点について説明

会場に着いたら点呼、体調確認、飲み物・食べ物を配布

花火見物終了後、参加者全員の点呼、安全と体調を確認、解散場所に誘導

解散場所到着後に全員を点呼、体調確認を実施し送迎班に引き継ぎ後、人にやさしい祭り委員会本部に報告

感想

終わった後に参加者のみなさんから感謝の言葉を頂いて、今までの苦勞が報われた気持ちでした。怪我もなくみなさんに笑顔で帰って頂き、来年も楽しみである。

ボランティアのみなさんの協力で、自分たちができていないところや分からないところも教えて頂いた。

参加者のみなさん全員が積極的に誘導などを手伝ってくださり、自分たちだけで全てをするのではなく、全員で花火の企画を準備し、楽しむということができたと思う。

次年度の課題

当日までの準備として車椅子が夜だと見にくいので、懐中電灯や車椅子への反射板を用意すべきだった。

露店の場所を当日までに確認しボランティアに伝える。

会場までの道中で列が分断された時はどうするか考えておくべきだった。

隊列表の作成ではトイレ介助のことを考慮し、隊列表を見た時に当事者とボランティアの役割を明確にする。

当日では送迎をしっかりと把握し、担当のボランティアに伝える。

参加者が来られた時には名前、体調を確認し担当のボランティアに引き合わせるべきだった。

会場の変更：今年度は花火見学会場が、帝人海浜社宅駐車場から東側の公園に変更になった。高い植木がなかったため、花火が見やすかったという参加者の声が聞かれた。

トイレの使用状況：トイレが健常者用も車いす用トイレとともに、汚物が山盛りに残っていたり、汚物が流れず利用者がバケツで水を汲んで流していた。非常に不潔であるとともにトイレを使用するのに時間がかかった。

(そ の 対 策)

花火見学会場については、公園でよいと思われる。

設置トイレの機能、トイレの数、衛生管理など再検討が必要であると思われる。

7) 露店散策

担当者：竹内・山下・金原

実施内容

A) 準備について

申込書から参加の時間帯、氏名、希望等を必要に応じて確認し、参加者とボランティアの配置を決める。

必要な資料を作成し、郵送する。

露店散策用の備品を確認し揃える。

B) 当日の実施内容

露店散策の前に、点呼、注意事項、体調確認等を行う。

露店散策時、体調確認しながら、休憩や水分補給をするように誘導し、本人の要望を重視しながら行う。

終了後、点呼を行い、体調確認、送迎、配布物の回収をする。

感想

露店散策で一緒の時間を過ごすことで、関わる上で何に配慮すべきか、手伝えるか等を知り、改めて自分の認識、障害を持つ方への理解を深めることができると思う。

参加者が露店散策で「見たこと」「感じたこと」を喜々として話されていて、祭りを楽しんでいる様子を見ることができると、聞いている自分も一緒になって楽しさを共有することができたように感じられた。

また、参加者とボランティアが両者そろって「楽しかった」「また参加したい」と言われると、心が弾むのと同時に、とても暖かくなり参加することができてよかったと感じた。

次年度の課題

踊り等と重なり参加時間が限定されるので、他に参加するか確認を行い、参加の状況に応じて、時間や人員の変更を行う。

また、スタッフが観覧席と兼務の場合、両方の仕事を円滑に行うために、2人ほど担当者があるとよい。

参加者とガイドの交流を深めるため、ガイドの人数を、4、5人程度にする。

8) 最終日のメインステージでの車いす使用者の観覧について

状況説明

最終日に、メインステージを観覧するために車いす使用者(後部の観客が集まる前から現時点で観覧)が前列左側スピーカー近くで観覧されており、その後、集まった後ろの観覧者から「よく見えない」という声がやさ実行委員会ステージ担当者へ届いた。

ステージ担当者は、車いす使用者という理由で本人に何の声もかけず、どのように対応すればいいかわからないと、人にやさしい祭り委員会の方へ電話で相談された。

まず人やさスタッフは当事者に状況を説明して移動を促すことを勧めた。再度、「ステージ担当としては対応がわからない」という連絡を受け現場に駆けつけた。

しかし人やさスタッフが現場に到着した時には、後ろの観客が全体的に右側へズレる形で対応した。

メインステージを観覧していた「後ろの観客に迷惑」をかけ、「不適切な場所で鑑賞している」車いす使用者の問題は、本人の知らないところでいつのまにか「解決」されてしまった。

結果的に、「車いす使用者」への対応は一般市民では難しいという「色眼鏡」、そして「後ろの観客に迷惑をかけた人」「不適切な場所で鑑賞していた人」というレッテルを「車いす使用者」に貼られた形で、まさに「不適切な処理」がなされてしまった。

(その対策)

従来はメインステージに車いす使用者が観覧にくることは極めて少なかったが、人にやさしい祭り委員会の活動をはじめ、やっさ祭りを通じて、障害者が市民権を得て地域へ出て行くことが当たり前になってきたことが背景にあると考えられる。

これに関しては、実行委員会へステージ計画を立てる際に3つの点から対策を検討していただきたい。

1つ目はステージを作る際、観客とステージをトータルでみていただくとともに、ユニバーサルデザインを念頭に置いていただきたい。

誰もが楽しく、安全で、安心してステージを楽しむにはどうすればいいか、観客にはどのような人がくるか予測する必要があるという意味である。

すなわち、予め車いす用スペースを準備していれば、スムーズに案内が可能である。

2つ目は、ひとりの市民として素直に声をかけるという、ちょっとした勇気と気配りがスタッフにあれば事なきを得ただけのことではないだろうか。

ステージを楽しむためには、障害の有無にかかわらず、丁寧かつ適切に車いすの方に事情を説明し（後ろの人が見えないこと）、適切な場所（車いすからも見やすく後ろにも迷惑がかからない場所）に常識的かつ丁寧にご案内すべきだったであろう。

3つ目は客席また観客の環境整備、担当の確保

障害者の利用を想定した緊急時の対応（予測される緊急内容）、通路の確保等を念頭に置き、必要な人員と担当者を配置したステージ計画を作成していただきたい。

9) 依頼事項・交渉先・打合せ詳細・打合せ内容・その他

人にやさしい観覧席、要約筆記、手話通訳者はそれぞれ代表者が、必要に応じて前日の実行委員会に参加、または具体的な打ち合わせをするための時間をとることで、当日お互いに気持ちよくかつスムーズに仕事が運ぶようにする。

10) 委員長所見

全体的には事故もなく、参加者もスタッフも楽しめ、大成功だったと思う。来年度もこのような楽しい祭りになるよう活動を継続していきたい。

また、前述したように今年度はいくつかの踊りグループの中に車いす使用者の参加がみられた。これは、人にやさしい祭り委員会の取り組みが地域に波及した効果と考えられる。障害の有無にかかわらず身近な人たちとともにごく自然に祭りに参加できるという点において、とても大切な現象であるにとらえられた。

一方、上記に挙げられた問題と課題は、各スタッフが十分なコミュニケーションをとることによって、解決できると考えられる。それぞれ忙しい中ではあるが、時間調整を行い必要に応じて実行委員会への参加や打ち合わせをする時間をもつこと呼び掛けたい。

「人にやさしい祭り」を目指していこうという精神は、単にひとにやさしい祭委員会だけのものではない。やっさ祭実行委員会すべての委員会、すべての委員が共有するものであり、各委員会がみずから率先して取り組むべき課題である。

今後も人にやさしい祭り委員会は、地域に暮らす障害者、高齢者、小さな子どもさんやお母さん、障害の有無にかかわらず「人にやさしいまちづくり」、「元気あふれる笑顔のまちづくり」に結びつくよう努力していきたい。

やっさ祭り三原市の地域力の関係年表

年	月	歴代委員長	経 過	備 考
1975	S50	12		国連「障害者の権利宣言」を採択
1976	S51	8	第1回	「やっさ祭り」に老人福祉施設入所者・身体障害者を招待
1977	S52		第2回	
1978	S53	2		三原市ボランティア協会設立総会
		8	第3回	三原市ボランティア協会連として「やっさ」に参加
1979	S54	3		三原市社会福祉施設等連絡協議会を設置
		8	第4回	三原市ボランティア協会連として「やっさ」に参加
1980	S55	8	第5回	三原市ボランティア協会連として「やっさ」に参加
1981	S56	8	第6回	三原市ボランティア協会連として「やっさ」に参加
1982	S57		第7回	三原市国際障害者年推進協議会を三原市障害者(児)福祉推進協議会に改組
1983	S58		第8回	
1984	S59	8	第9回	三原市民生・児童委員連合協議会、ボランティア協会合同チーム「やっさ」に参加
1985	S60		第10回	
1986	S61	8	第11回	三原市民生・児童委員連合協議会、ボランティア協会合同チーム「やっさ」に参加
1987	S62	8	第12回	三原市民生・児童委員連合協議会、ボランティア協会合同チーム「やっさ」に参加
1988	S63	8	第13回	三原市民生・児童委員連合協議会、ボランティア協会合同チーム「やっさ」に参加
1989	H1		第14回	三原市民生・児童委員連合協議会チーム「やっさ」に参加
1990	H2	8	第15回	三原市民生・児童委員連合協議会チーム「やっさ」に参加
1991	H3	8	第16回	三原市民生・児童委員連合協議会チーム「やっさ」に参加
1992	H4	8	第17回	三原市民生・児童委員連合協議会チーム「やっさ」に参加
1993	H5	8	第18回	三原市民生・児童委員連合協議会チーム「やっさ」に参加
1994	H6	8	第19回	三原市民生・児童委員連合協議会チーム「やっさ」に参加
1995	H7	1		阪神淡路大震災
		8	第20回	三原市民生・児童委員連合協議会チーム「やっさ」に参加
1996	H8	3		人工呼吸器使用の障害者が在宅生活を開始
		6		三原市障害者ニーズ調査報告書完成
		8	第21回 大谷麻祐子	人にやさしい祭り実行委員会発足し、「寿波苑」チ-ムと初出場
		8		三原市民生・児童委員連合協議会チーム「やっさ」に参加
1997	H9	1		日本海重油流失事故(ナホトカ号)
		2		三原市第2次障害者長期行動計画(障害者PL)検討開始
		6		「みはらケアネットワーク」結成
		8	第22回 瀬井宏美	やっさ踊りに寿波苑チームと参加(2回目)
		8		三原市民生・児童委員連合協議会チーム「やっさ」に参加
1998	H10	7		三原市第2次障害者長期行動計画(障害者PL)素案提出
		8	第23回 中澤響美	明日に架ける橋チーム「やっさ」へ初出場
		8		三原市民生・児童委員連合協議会チーム「やっさ」に参加
1999	H11	3		三原市第2次障害者長期行動計画(障害者PL)策定
		4		三原市ボランティアセンターにVコーディネーター配属
		8	第24回 峯岡 円	明日に架ける橋チームやっさへ(2回目)
		11		三原市Vrグループ紹介ガイドブック素案をVrで自主製作 三原市Vrアドバイザー養成講習をVrが自主的に開始
2000	H12	4		介護保険法施行
		8	第25回 岩間雅子	明日に架ける橋チーム「やっさ」祭りに参加(3回目)
		10		三原市障害者生活支援センター「ドリームキャッチャー」開設
2001	H13	3		芸予地震 3月24日(土) 15時28分
		3		三原市災害ボランティアセンター開設(3月27日~5月2日)
		5		精神障害者地域生活支援センター「さ・ぼーと」開設
		5		須波海浜公園 車いす用スロープ完成
		8	第26回 北山良平	明日に架ける橋チーム「やっさ」祭りに参加(4回目)
2002	H14	6		三原市において全身性障害者生活支援制度開始
		8	第27回 糠塚裕子	明日に架ける橋チーム「やっさ」祭りに参加(5回目)
2003	H15	6		三原市第3次障害者長期行動計画(障害者PL)検討開始
		12	第28回 鏡本智昭	明日に架ける橋チーム「やっさ」祭りに参加(6回目)
		12		三原市障害者ケアマネジメント従事者養成講習開催 三原市障害者(児)福祉推進協議会を三原市福祉のまちづくり推進協議会に改称
2004	H16	3		三原市第3次障害者長期行動計画(障害者PL)策定
		3		三原駅エレベーター設置
		8	第29回 鏡本智昭	明日に架ける橋チーム「やっさ」祭りに参加(7回目)
		8		三原市災害ボランティアセンター設置(台風10・16・18号)
		9		三原市新文化会館建替え工事市民公開ヒアリング
		10		中越地震 10月23日(土) 17時56分
2005	H17	3		合併により新三原市が誕生(三原市・久井町・本郷町・大和町)
		8	第30回 鏡本智昭	明日に架ける橋チーム「やっさ」祭りに参加(8回目)
		9		三原市災害ボランティアセンター設置(台風14号)
		9		災害支援ボランティア(若国市)
2006	H18	7		「地域福祉フォーラムinみはら」開催
		8	第31回 大島静香	明日に架ける橋チーム「やっさ」祭りに参加(9回目)
2007	H19	3		能登半島地震 3月25日 9時41分58秒
		7		中越沖地震 7月16日 10時13分23秒
		8	第32回 岡田麻里	明日に架ける橋チーム「やっさ」祭りに参加(10回目)
2008	H20	4		三原市防災ネットワーク設立
		8	第33回 岡田麻里	明日に架ける橋チーム「やっさ」祭りに参加(11回目)

あとがき

やっさ祭りと共に三原の名物の一つに“蛸”がある。世界の蛸消費量の約6割を日本が占めており、日本では重要な漁業資源である。三原は瀬戸内海有数のマダコの産地であり、明石の蛸と並び称され珍重されている。

“蛸”はたいへんにきれい好きな生き物であると言われ、三原の沖合は水温が一定し砂と適度な岩場があって生息にたいへん適した環境が整っている。

栄養的には“蛸”は低カロリーであるが良質の蛋白質にとみ、疲労回復にも効果があるタウリンや亜鉛も豊富であるため、関西では夏バテを防ぐために食する習慣があるという。

しかし、“蛸”はいわゆる高級魚ではない。庶民とともに生きてきた。“蛸”にまつわる故事や言葉、キャラクターにはどこかユーモラスで愛嬌があり、庶民の“生活のにおい”が染みついているものが多い。

一方で、“蛸”は無脊椎動物の中で最も高い知能を持ち、色の弁別や形の認識、学習、問題解決の能力すら持っているとも言われ、身を守るために保護色へ変化し、体型を地形に合わせて柔軟に変え、それを数年間保持することすらできるという。

また、たくさんの吸盤のついた八本の腕を持ち柔らかな体は筋肉でできており、時に強力な力を発揮する。“蛸”は主として夜に活動し、八本の腕で獲物を絡め取り、腕の吸盤で固い殻をもこじ開けてしまう。

さて、地域づくり、まちづくりが叫ばれて久しい。そこには住民が主体的に参加・参画し、みんなの知恵と技と汗を結集することこそが必要であろう。しかし今一度、「誰のための」、「何のための」地域づくりかを再考してみることが大切ではないだろうか。

地域づくりの目で「やっさ祭り」を眺めてみると、庶民の祭りとして始まった「やっさ祭り」は「誰が主役なのか」を思い起こさせ、原点に戻るきっかけを私たちに提供してくれる。それはあたかも古(いにしえ)の人々の生活の知恵の集大成であるかのように感じられる。本来的に「祭り」とはそうしたものなのかも知れない。

厳しい世相の今こそ、障害者も、高齢者も、こどもも、すべての市民が一人ひとりの市民を大切に、一人ひとりのさまざまな“生活のしづらさ”をわかちあい、ともに手を取り合って、ともに悩み、ともに行動し、ともに生きることが真に求められているように思えてならない。

三原の名物の“蛸”のように、柔らかで強力な体と八本もの腕を駆使して、ネットワークを築きあげることが必要とされている。蛸は夜行性であるが、イギリスのカフェも様々な人たちが種々雑多な議論を交わす場としておいしい成果を上げてきた。異なる考えや経験を持った人々が交わることの大切さ、ここから新しいものが生まれると確信している。

やっさ祭りを通じて“庶民の底力”を再発見し、それぞれの個性を活かし活かされ、その中でつながりを築き上げて協働して、ともに学び、ともに育ち、ともに変わっていく、元気が町中にあふれる“人にやさしいまち”ができることを願ってやまない。

平成20年度 第33回三原やっさ祭り
人にやさしい祭り委員会 報告書

発行日 平成21(2009)年7月
発行者 人にやさしい祭り委員会
事務局 三原市ボランティア・市民活動サポートセンター
〒723-0014 広島県三原市城町1丁目2番1号
三原市総合保健福祉センター(サン・シープラザ4F)
TEL 0848-67-9339 FAX 0848-63-0599
ホームページ <http://www.totto.info/hitoyasa/>
編集 有限会社 創意

この報告書は、平成20年度共同募金会三原市支会の助成により作成しました。